

子ども学の源流を次世代につなぐ

# 幼児の教育

[特集] 保育現場で気になるコトバ考

「評価」って何だ？

[実践研究] 私の保育ノート

変わるもの・変わらないもの

[子ども学探訪] 倉橋惣三とキンダーブック

敗戦後復刊されたキンダーブック

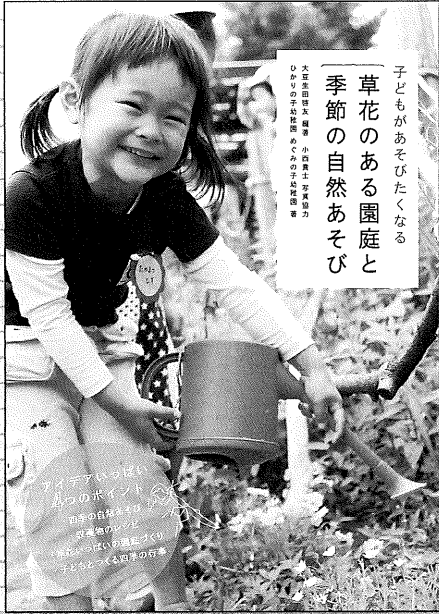
冬

2014

2015

since 1901

# 子どもがあそびたくなる 草花のある園庭と季節の自然あそび



子どもがあそびたくなる  
草花のある園庭と  
季節の自然あそび

大豆生田啓友 著  
ひかりの子幼稚園・めぐみの子幼稚園

「子どもは植物のポイントを  
四季の自然あそびや  
写真集のイラスト  
などから学びの機会を  
とらえていくのが大事」

## 自然あそびが変わる！

子どもがあそびたくなる自然環境づくりと  
自然を使った保育のアイデアがいっぱいです。  
「保育ナビ」人気連載中の  
大豆生田啓友先生、  
表紙写真家小西貴士先生の最新刊！

### 内容

- ★ 1章 四季を感じる 自然あそび
- ★ 2章 子どもとつくる 四季の味
- ★ 3章 草花いっぱい の 園庭づくり
- ★ 4章 子どもとつくる 四季の行事

大豆生田啓友／編著 小西貴士／写真協力  
ひかりの子幼稚園・めぐみの子幼稚園／著

定価 本体 1,700円＋税 26×19cm 80ページ

10944

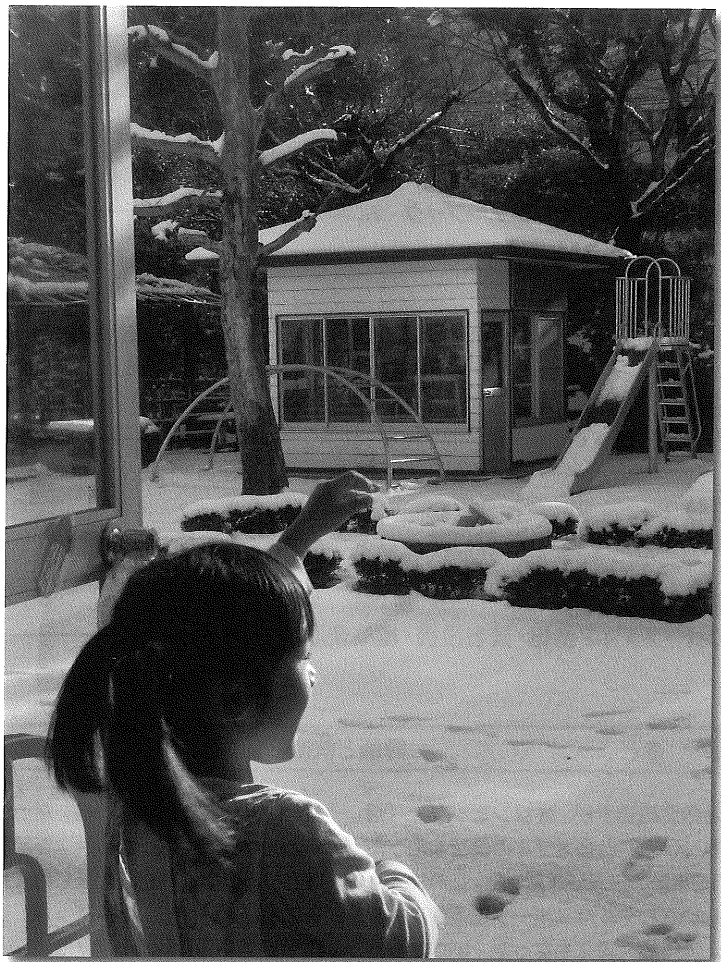


身近な自然を使ったあそびのアイデア



写真とイラストを多用しわかりやすい！





雪の日の朝

「わあ！ まっしろ」

子どもの情景

【子ども学探訪】

編輯顧問 倉橋惣三 とキンダーブック ⑫

敗戦後復刊されたキンダーブック 浜口順子 ————— 50

【報告】

「そばにいて育つ — お茶大附属『幼保』のかかわり —」 私立和子・宮里暁美・浜口順子 ————— 56

【論考】

アメリカから帰って 津守 眞 ————— 62

【目録】

『幼児の教育』平成26年 総目録 ————— 70

【子ども学のひろば】

イベント・メディア情報・読者投稿・編集後記他 ————— 71

まど

評価と快楽

水泳の北島選手が、オリンピックで「超気持ちいい！」と金メダルの喜びを語ったのは10年前の2004年だった。これは人々に新しいさわやかなスポーツ選手像を印象付け、流行語大賞にもなった。いつからだろう、何か偉業を成し遂げたスポーツマンが「楽しめてよかった」などと、さりげなく話すのをテレビでよく見かけるようになった。さぞ大変な努力をしてきたのだろうに……と凡人の私は思ってしまう。

今号の特集テーマは「評価」——。昭和の高度成長期のモットーは、「根性」「努力」「忍耐」、いわゆる「スポ根」魂である。勝

利とは「血と汗と涙の結晶」だったのである。その時代、官庁や企業は年功序列制度をとり、こつこつと長くまじめに勤め上げることが人事評価の基準だった。個人的資質や能力の違いは（一応）二の次とされ、うまくいかないと「忍耐」や「努力」が足りないと自責する人間を育ててきた。それが今、個人的能力や成果を評価する時代へ転換しつつある。人々はその中で、自己の能力・成果を上げるには「楽しむ」ことが効果的であること、仕事と「楽しむ」こととは矛盾せず、それこそが人生の質を高めるカギであることを感じ始めている。(H)

# 目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある  
ステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

## 【写真】

子どもの情景 ①

## 【目次 まど】

評価と快楽 ②

## 【特集】

### 保育現場で気になるコトバ考 4

#### 「評価」って何だ？

幼児期の教育における評価 神長美津子 ④

今回の特集について ⑧

「主体的な語り合い」が育む保育の質～保育カンファレンス再考～ 松永静子 ⑩

柔軟な姿勢で新しい評価を 光畑由佳 ⑭

『幼児の教育』アーカイブズから 解説・草信和世 ⑱

## 【シリーズ】

### 子どもが育つ場所から

お母さんが元気であることが保育の原点 武田京子 ⑳

## 【実践研究】

### 私の保育ノート

これまでの保育を振り返って 齊藤雅子 ㉓

変わるもの・変わらないもの 森藤郁子 ㉖

## 【保育エッセイ】

### 保育の世界を豊かに生きる子どもたち ④

「会話すること」と「みんなの前で話すこと」における子どもの生 榎沢良彦 ㉔

## 【本棚】

### 古典の散歩道

“奇跡の人”とはだれか 『ヘレン・ケラー自伝』 佐治 恵 ㉘

## 特集

# 保育現場で「気」になる「トバ考」4

## 「評価」って何だ？

### 幼児期の教育における評価

神長美津子

(大学教員)

はじめに

より良い教育の実現のためには評価は欠かすことができません。評価を通して自らの指導の過程を振り返るとともに、子どもの発達や学びへの理解を深め、それらを次の指導に生かすというプロセスは、教育の水準の維持・向上に不可欠です。しかし、教育における評価の意義を踏まえつつも、いざ評価を具体的に進めていこうとすると、「評価の規準がなくてよいのか」「果たして指導の改善につながるのか」、あるいは「誰のための評価なのか」等々、評価にかかわる悩みや課題は尽きません。

一方に、教育における評価に対する誤解からでしょうか。「一人ひとりの良さや可能性を生かす幼児期の教育には、評価は必要ない」とする意見を聞くこともあります。幼児期の教育にお

神長美津子（かみながみつこ）  
國學院大學教授。専門：幼児教育、保育。  
著書：『幼児教育の世界』（学文社）、『はじめよう幼稚園・  
保育所と小学校との連携』（フレーベル館）。

ける評価の考え方は、教科等の学習が中心となる小学校以降の教育とは大きく異なります。だからこそ、幼児期にふさわしい教育を実現していくための評価のあり方や進め方について、幼児教育関係者はもちろんのこと、保護者も含めて広く理解を得る必要があります。

本稿では、これらのことを踏まえ、幼児期の教育の質を向上させるために必要な評価とそのあり方について考えます。

### 幼児理解から始まる評価

幼児期の教育の質の向上につながる評価は、大きく三つの段階に分けられます。第一は、保育者一人ひとりが行う日々の保育の反省・評価です。第二は、教育課程や保育課程の編成と実施に対する評価・改善です。第三は、地域に関われ信頼される組織づくりの一環として行われる学校評価です。いずれの評価もより良い教育の実現につながるものであり、三つの段階で評価を適切に行うことが求められます。

特に、「日々の保育の反省・評価」における保育者の基本的な姿勢には、すべての評価に臨む保育者の姿勢に通じるものがあります。一人ひとりの良さや可能性を生かす幼児期の教育では、保育者が子ども一人ひとりの行動やその成長を温かく見守るまなざしを持って接し、幼児理解に基づく評価をすることが、保育のスタートにあります。

子どもは、保育の中でさまざまな姿を見せます。時には「友達の遊びの邪魔をしてばかりで、うまく遊べない」等、マイナスと思える行動もあります。しかし、「その子どもは、なぜそうするのか」という視点から子どもの行動の理解を深めると、一見マイナスと思える行動の中に、発達的な意味を読み取ることができます。つまり、「友達の遊びの邪魔をする」ということは、

「友達への関心が芽生えつつある」ということの表れであり、「邪魔をする」という行動は、その思いがうまく表現できないでいる結果として受けとめられます。こうした発達の理解を踏まえた上で、「保育者のかかわりは適切であったか」「人的・物的な環境の構成は適切であったか」「設定したねらい及び内容は適切であったか」と、自らの指導の過程を振り返ります。

日々の保育の振り返りでは、子どもとの触れ合いを通して、発達の理解を深めていきます。その際、保育終了後に書きつづる保育記録は欠かせません。保育記録に記された一つ一つのエピソードは、断片的であり、そこから得る情報は限られているかもしれませんが、毎日書きつづることにより、断片的な子どもの姿がとなり、その変化に気付くことができます。いずれにしても、子どもの姿に温かな関心を寄せることが、評価の第一歩となるのです。

### 保育者間で子ども観や保育観を交流する

子どもの理解を確かなものとしていくためには、保育者間で子ども観や保育観を交流し、保育者自身が視野を広げ、多様な視点から援助を考えることが必要です。保育者は、自分が担任する子どものすべてを理解しているわけではありません。むしろ、担任からすると気になることが多い子どもですが、立場を変えて隣のクラスの保育者から見ると、その子どもの持っている良さがわかることもあります。保育者同士の協力体制をつくり、多くの目で見たことを重ね合わせながら、評価に臨むことが必要なのです。

特に、「教育課程・保育課程のその評価・改善」では、園長のリーダーシップの下、保育者間で十分に話し合い、子どもの見方や保育の考え方を高めていくことが重要です。そのことにより、独りよがりの見方や考え方を超えることができます。「私の保育」から「私たちの保育」へ、



さらには「わが園の保育」を考えていくことが必要なのです。

幼児期の教育における評価は、保育者一人ひとりの持つ子どもの見方や保育の考え方に基づくわけですから、ある意味では主観的なものなのかもしれません。それが、その主観を磨き、より客観化していく努力が必要です。このため、互いに保育を見合ったり、保育について語り合ったり、時には他の園の保育を参観したりして、研鑽を積んでいくことが必要です。

また、教育課程や保育課程は、一度編成すると、毎年そのまま継承されてしまいがちですが、そうではなく、年度末には短期や長期の指導計画の評価・改善に沿って見直します。より良い教育は、評価・改善を積み重ねることによって実現していくのです。

### 評価を通して、信頼性や妥当性、納得性を得る

平成十九年学校教育法改正により実施されている学校評価では、教職員による自己評価に加えて、学校関係者評価を適切に行うことが求められています。学校関係者評価は、学校に関係がある、またその地域においてそれぞれの分野でリーダーとして活躍している方々に、学校の教職員が行う自己評価について検討してもらおうシステムです。あくまでも教職員による自己評価が基本ですが、その自己評価が独りよがりなものにならないようにすることを目的として実施するものです。

幼児期の教育は、いわゆる「見えない教育」と言われています。したがって、幼稚園における学校評価では、学校関係者評価を通して、いかに信頼性や妥当性、納得性を得るかが課題となっています。そのためにも、「わが園の教育」を広い視野と長い目で見つめ直し、より質の高い教育を目指していきたいものです。

## 今回の 特集に ついて

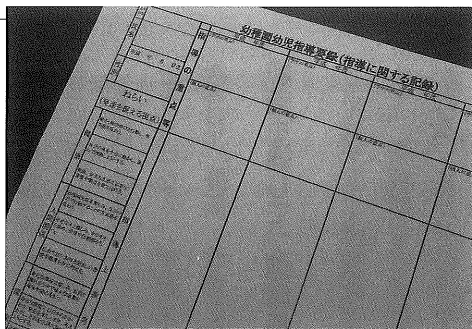
# 「評価」って何だ？

一九九〇年代、日本では幼稚園教育要領が大きく一新されたところから、子どもの教育評価が「何がどれだけできるようになったか」「試験で何点取れるか」などの、数量的・可視的・競争的な視点から行われがちな傾向に対

化や詰め込み教育への批判などの中で、新しい子ども像と教育観が求められるようになってきたからである。

して疑問や批判が起こり、それに代わる評価方法が模索されるようになる。産業構造の変

一方、グローバル化の進展する中で、欧米先進国は、乳幼児教育・保育の開発と保障、質の向上を、経済社会政策における不可欠のファクターとして考えるようになった。政策決定は、客観的包括的な教育評価を根拠に行われるため、エビデンスベース（科学的根拠のある）の乳幼児教育実践・研究への社会的ニーズが広がった。日本にもこの影響は及び、「エビデンス」や「アカウンタビリティ（利



用者や関係者など社会に対する、保育・教育の目的・計画・成果を説明する責任」という用語がよく使われている。多くの先進各国における乳幼児教育の実態や評価などを、経済開発協力機構（OECD）が総括的に公表したものが、「Starting Strong（人生の始まりを強く）」というタイトルの白書である。

日本も欧米も、より良い評価法を求め研究を進めているが、「評価」という用語自体が、日本における評価論を複雑化させている面がある。二〇一三年オスロで開催された、学校評価に関する国際会議（OECD）の資料を参照すると、日本語で「評価」という一つの言葉で表されるものが、英語の四つのワードで使い分けられている。実例を挙げよう。

- ・ Student Assessment 生徒（子ども）の評価
- ・ School Evaluation 学校の評価
- ・ Teacher Appraisal 教師の評価

つまり Assessment, Evaluation, Appraisal という、「評価」を意味する三つのワードが異なる対象に使われている。

加えて、四つ目のワードは Review である。これは、国家や組織による包括的な評価を指す。例えばニュージーランドは、行政機関から分岐した教育評価機関を持ち、全国の教育組織（学校や幼稚園など）の包括的教育評価（Review）を行い、それに基づいた指導を実施している。

日本では、異なる相の「評価」が一つの言葉で表現されている。このことの長所と短所を考慮する必要がある。

（浜口順子）



## 視点1

# 「主体的な語り合い」が育む保育の質 〜保育カンファレンス再考〜

松永静子

(大学教員)

### 「保育を開く」カンファレンス

医療・看護の世界では日常用語のようにカンファレンスという言葉が使われているが、実際に職場に定着したのは、今から五十年余り前であったという。医療・看護の世界ではチームの協力的体制、協働なしには患者のケアが十分に行われない。このカンファレンスはそれぞれの専門職の情報提供をもとにコミュニケーションが図られる場であり、患者のより良いケアを目指してディスカッションする場でもある。<sup>注1</sup>

保育におけるカンファレンスについては、森上は稲垣らが提唱した授業カンファレンスの試みをもと

に「保育を開く」上で最も有効であると述べている。「保育を開く」意味については、保育現場で起こっているさまざまな出来事を生かすように保育者の心と体が開かれていることであり、「私の実践」も他者のそれと交流しながら、省察を重ねる中でより適切なものになっていくことであると述べている。<sup>注2</sup>

二〇〇八年に改定された保育所保育指針では保育の専門性の向上がうたわれ、園内研修は施設長の責務としている。以来、園内研修は保育の現場でさまざまな方法で盛んに行われるようになった。しかし園内研修が現場の実践に生かされているかを問うたアンケート(二〇一二年)では、保育士らも施設長

松永静子(まつながしずこ)  
白梅学園大学子ども学部准教授。

も、十分に生かされていないと回答していた<sup>注3</sup>。今日の前にいる子どもの保育は日々予想通りにはいかないのが当然であり、保育者は試行錯誤しながらの実践となる。これらを工夫したり、また創造したりするのが保育であるとするなら、自分一人で抱え込むことなく、カンファレンスにより他者と交流し合い、気付き、見直すことがより重要となる。

### 保育所におけるカンファレンスの試み

ここでは特に保育所におけるカンファレンスを取り上げて述べていきたい。保育所は勤務がシフトしており、話し合いの場の設定（特に時間）が難しい。カンファレンスは一堂に会して話し合う方法であるが、それを定例的に持てるか、事前の情報共有について徹底を図れるかが課題なのである。その点は、例えば一クラスの担任保育士のみメンバーを限定したり、各クラスから一名出て少人数グループでのカンファレンスにしたりすることで、継続的に行うことが可能となる。

筆者はこれまで「自立的な園内研修に関する研究」<sup>注4</sup>に取り組み、若手の保育士（新卒後勤務年数5年内）対象に、実践場面のビデオ映像を通して保育を振り返るカンファレンスについて分析し考察を行ってきた。カンファレンスにより気付いた課題に取り組み、実践を変化させていく方法は、保育士らの実践のモチベーションを高め、実践を変える行動へとつなげていた。

また、保育場面を「エピソード記述」として記録し、各クラスから一名出てエピソード記述をもとにカンファレンスを積極的に取り入れ、積み重ねてきた岩屋保育園（京都）の例もある。園長の室田氏はその著書の中で、「エピソード記述をカンファレンスの資料にして、問題解決型ではなく、いろいろな角度からいろいろな意見を出し合うと、子どもの姿が議論の中から立ち上がってくる、『保育つて奥が深いなあ』と感慨が残る」と述べている。また、子どもの気持ちや思いを保育者がわが身のように受けとめるという基本的な態度を身に備えた所以はこの

カンファレンスの積み重ねであることは言うまでもないと述べている。つまり保育者の資質を高めることを実証的に示されている。エピソード記述を資料とするカンファレンスの蓄積が主題を深め、そのことを子ども、保護者、保育者間で共有するとしている。このことについて授業カンファレンスを試みた稲垣らも、カンファレンスの話し合いによって「いろいろな側面や問題が浮かび上がり、自分の現在が変わっていく」と、室田氏同様に教師の変化に着目している。

### 話し合いを深めるために

カンファレンスで活発な話し合いにならないという悩みをよく聞く。どのようにカンファレンスを進めていけば、話し合いが深められるのだろうか。保育所には勤務時間にずれがあり、担任同士であつても、保育場面での出来事やその日保護者から伝えられた情報をすべて共有することは難しく、子どもへの理解が断片的になったり、そのため子どもへのか

かわり方の違いや保護者への対応に問題が生じることもある。その上、現場は常に忙しく十分な説明の時間も互いに保障できない。カンファレンスを開く要件としては保育者同士の親密なコミュニケーションが前提である。そのためには、日々の保育のささやかなエピソードなどを何気なく他者に語ることができる人間関係づくりも必要である。

また、カンファレンスの必要性などを互いに感じているか、少しでも良い保育をしようという意思があるか、なども問われる要件である。幾つかの要件を整えながらカンファレンスを行うこと、この話し合いの土壌が、保育者のみならず子どもも保護者も含めた園の文化を創り上げることにもなっていくのである。保育者にはそれぞれの個性があり、言葉での伝え方、対話能力に大きな差がある。カンファレンスを開く時はまず保育者が自分と他者との違いを互いに受けとめ、共有することから出発したい。また保育カンファレンスでは、問題提起の有無にかかわらず、ここで語ること、語り合うことで互いの存在

が際立つこともある。保育者であると同時に一人の人として、子どもや保育者、保護者と向き合っているからこそ、語り合い、共有することの喜びや充実感が見えてくる。そして、互いの存在によりそれは鮮明になるのである。

一方で、カンファレンスによる実践のダイナミックな変化に驚かされる。学ぶ意欲のあるグループでの話し合いでは、互いの意見に触発されたり、啓発されたりすることも多い。「自立的な園内研修に関する研究」<sup>註4</sup>において成果を上げていたのは、カンファレンスでエネルギーをエンパワメントし、持てる力を発揮し、実践に反映させていった例であった。

このような保育カンファレンスにしていくための幾つかの効果的な方法がある。カンファレンスの目的にもよるが、メンバー構成に工夫が必要である。若手保育者とベテラン保育者を組み合わせると、ベテラン保育者主導になりがちである。若手の保育者が自由に語れる場合は必ず用意しておきたい。また保育所は保育者以外の職種のメンバーも加わること

で、特に問題解決型のカンファレンスなどは多様な視点での議論が期待できる。

さらに、効果的にカンファレンスを進める上で最も重要なのは、保育者の主体的な語り合いである。カンファレンスで語り合うことは紛れもなく保育を振り返ることである。自分の実践に真正面に向き合い語ることに、そして互いに語り合うことから、保育者は主体的に学び、次の実践をより良いものにしていく。まさに主体的な語り合いが育む「保育の質」である。

参考文献

- 1 川島みどり他『看護カンファレンス』医学書院 二〇〇八年
- 2 森上史朗「特集 保育を開くためのカンファレンス」  
『発達』68 ミネルヴァ書房 一九九六年
- 3 松永静子「保育の質を高める自立的な園内研修」園長がとらえる研修とは？」日本保育学会第65回発表論文集 二〇一三年
- 4 松永静子「保育の質を高める自立的な園内研修」日本保育学会第64回発表論文集 二〇一二年

## 柔軟な姿勢で新しい評価を

光畑由佳

(会社代表)

一言で評価と言っても、社会に出てからの評価は学生時代のテストや通知表のように、わかりやすい数字によるものばかりではありません。そして、仕事に対する評価は、学生時代以上に厳しいものかもしれません。私自身も、私の会社も、常に社会の中の厳しい評価にさらされています。そして、その評価は、時代と共にずいぶん変わってきたように思えます。自分自身の活動を振り返りつつ、評価についての事例を幾つか語ってみたいと思います。

私は「モーハウス」という「授乳服」を作る会社を運営しています。授乳服とは、読んで字のごとく、母乳を与えるための服です。今はだいたい市民権を得たこの言葉ですが、私がモーハウスを始めたころは、「授乳服」という言葉すら、誰も知りませんでした。

十七年前、子どもが生後一か月のころ、電車の中で泣かれてしまい、仕方なく公衆の面前で、胸をはだけて授乳しました。私にとってはとても強烈な体験でした。当たり前前に子育てすることに、これほどに困難があることに気がつき、「子育てと社会をつなぐツール」として、授乳服を作り始めました。

しかし、この服は、当初、まったく売れませんでした。お母さんたちの多くからは、「自分が外に出るのを我慢すれば済むことだから」「子育てにお金がかかるのに、自分の物にはお金を使えない」と言われました。

つまり、この服に対する「評価」は、とても低かったわけです。

でも、私は、そうした意見に納得がいきませんでした。



した。私自身がこの服を初めて着た時の、羽根が生えたような気持ち。それは、自分でも想像できなかったほどの気持ちの変化でした。私にとって授乳服は、単なる「育児グッズ」ではない、私自身の生き方を変革するきっかけになるものでした。

授乳服を「いらぬ」と言ったお母さんたちの評価基準は、母親がガマンすることを良しとするものでした。でも、私は、お母さんが笑顔であることは、子どもの笑顔につながると信じ、お母さんたちが楽になることを良しとしたいと思いました。

もし、当時のお母さんたちに評価される物を作ろうとしたならば、私は早々に授乳服をあきらめ、ベビー服や、おもちゃを作ったことでしょう。でも、私は、その評価基準を変えてでも、「授乳服」を伝えていきたいかったです。



▲モーハウスの授乳服を着ての授乳

そして、私は、服を売ることではなく、イベントやサロン、そして赤ちゃんと一緒に働ける「子連れ出勤」を始めました。

例えば、自宅を開放してお母さんたちのサロンを開きました。そこでは、すでにユーザーであるママたちが、赤ちゃんに授乳したり、遊ばせたりしながら、和やかに過ごしています。その姿を見れば、「子育ては独りぼっちで頑張らなくてもいいのだ」と、多くのママたちは気付きます。

また、「授乳ショー」と題し、イベントのステージでお母さんたちに授乳をしてもらったこともあり、ます（もちろん、授乳服を着ているので、胸は見えません）。銀座「授乳パレード」と称した、大勢のお母さんが赤ちゃんに授乳をしながら練り歩くイベントにも参加しました。また、オフィスや東京・青山と茨城・つくばにあるショップでも、スタッフが赤ちゃんを抱っこして働き始めました。

こうしたさまざまな活動を見たり体験したりすることで、多くの方が、「子育ては家の中で閉じこもってやらなくてはいけないものではないんだ」と気

付いてくれます。そして、授乳服を着て、赤ちゃんと共に生き生きと外に出ています。

今振り返ると、こうした活動は、服を売ることではなく、ママたちの「評価基準を変える」ためのアクションだったのだと思います。

こんなふうには、「授乳服」をきっかけに、自由に、笑顔あふれる子育てを楽しむママたちが増え、その子どもたちが、ママの笑顔に包まれる。このことは、物事を自由にしなやかに「評価」した結果、自分らしくいつも笑顔で人生を楽しめるようになるということだと思っています。

次世代に、そんな「評価」の連鎖をしていきたい。未来の担い手に伝えたい。そう思い、高校や大学などで講演を行っています。

現在、かつてない少子化が社会問題となつています。実際、例えば講演先の大学生に「子育ては大変だと思う人は？」と聞くと、ほぼすべての学生が手を挙げます。幼い子たちのおままごとでも、お母さん役は人気がない（なぜならお母さんは大変そうだ

から）、とも聞きます。これでは、少子化も当たり前と感じます。

その際、私は、一人の女の子の写真を紹介しました。「ふみちゃん」という一歳半になる子のお母さんは、モーハウスで一年働いていました。ふみちゃんは、お母さんと一緒にモーハウスに来て、抱っこされたり、おっぱいをもらったり、遊んだりしながら育ちました。

私が見せたのは、ふみちゃんが赤ちゃん人形を抱っこしている写真です。それだけではありません。ふみちゃんは片手にノート、片手にペンを持っていました。つまり、ふみちゃんは、ワーキングマザーごっこをしているのです。ふみちゃんにとって、子育てをすることも、働くことも、共に、彼女にとつての明るい未来でしょう。こんなふうには未来を信じる子どもが育っているのを、私はうれしく思います。

与えられた評価基準の中で評価されるように努力するだけでなく、自分が正しいと信じる別の基準をセットする。そんな考えも、時には必要なのではないのでしょうか。

今、私たちは、お母さんたちだけでなく、お母さんにかかわる医療関係者のマインドセット（既成概念から来る思い込み）を変えたいとさまざまな取り組みを行っています。「一人で頑張る子育てが素晴らしい」から、「皆の力を借りて子育てを楽しむことが素晴らしい」に。そのためには、私たちからだけではなく、病院や産院でお母さんと接する医療関係者の理解と協力が、後押しが欠かせません。専門家が集まる学会にもここ数年は参加し、研究発表を行いました。授乳服をデザイン、販売している会社が、医療関係者へのアプローチに重きを置く。これももしかしたら新しい評価を築いているのかもしれない。

「いかに自分で頑張るか」という評価基準でなく「いかに子どもと楽しむか」という評価基準に変われば、子育て観はずいぶん違うものになると思います。

このような私たちの活動は、当初はどんな活動をして「結局営利企業だから」と認められない傾向もありました。NPOにすればよいのに、とも言われました。しかし、これも、ある時期から流れが変

わってきました。「社会起業」という言葉が作られ、企業であろうとNPOであろうと、社会的なミッションを成し遂げることを第一義とする団体があるということが知られてきました。

そして、そのころから、行政などから賞を頂く、つまり「評価」していただく機会も増えてきました。十七年前は誰からも「評価」されなかったモーターハウスの評価は、変わってきたのです。

「評価」とはこんなものなのだと思います。これまでは違う価値軸で計れば、当然ながら、評価は変わります。そして、その結果、「評価」は社会も団体も変え得るのだと思います。

何を評価す

るか。それは、理想を伝え、どうあつてほしいのかを伝えるメッセージなのかもしれません。



▲青山ショップでの子連れ出勤

## 「評価」

いにしへの「評価」に思いを巡らせたところ、その原点は実践後の振り返りの時ではないかと気付きました。今回はその時を取り上げた、「子どもが帰った後」（一九三三年）、「幼児の帰った後のしじま」（一九五二年）の二編をまずご紹介したいと思います。どちらも倉橋惣三によるものです。

最初に「子どもが帰った後」についてです。この一編は、『育ての心』<sup>註</sup>に掲載されており、ご存じの方もいらっしゃるのではないでしょう。ここで彼は、保育者が自分の保育を振り返り、「評価」する姿を描き出します。ねらいを持って教育活動を行い、その達成について常に「評価」・反省を加えていく教師の姿を彷彿とさせ、現代の「評価」に通じるも

のが感じられます。

子どもが帰った後

（一九三三（昭和八）年 第三十三巻第七号）

倉橋惣三

子どもが帰った後、その日の保育が済んで、まずほっとするのはひと時。大切なのはそれからである。子どもといっしょにいる間は、自分のしていることを反省したり、考えたりする暇はない。子どもの中に入り込み切って、心に一寸の隙間も残らない。たゞ一心不乱。

解説／草信和世

（大学教員）

子どもが帰った後で、朝からのいろ／＼のことが思いかえされる。われながら、はっと顔の赤くなることもある。しまったと急に汗の流れ出ることもある。あ、済まないことをしたと、その子の顔が見えて来ることもある。——一体保育は……。一体私は……。とまで思い込ませられることも常である。

大切なのは此の時である。此の反省を重ねている人だけが、真の保育者になれる。翌日は一歩進んだ保育者として、再び子どもの方へ入り込んで行けるから。子どもが帰った後で、此の反省をしない人。疲れて、ほっとして、けろりとして、又疲れて、ほっとして、けろりとして、同じ日を重ねるだけの人。その日ぐらしの人に進歩はない。

夏やすみにも、此の同じ意味の大切さがある。

次に「幼児の帰った後のしじま」についてです。

彼はここで、「保育が幼児のために何を残すかは、

素より大切なことである。がまた、保育が日々にわれらに何を残すかも貴重なことである」と述べて、保育が自分に残すものを「保育の味」として味わう保育者を描き出します。そのひとときから力を得て、一年二年と保育を続ける保育者を思い起こさせるとともに、その味は、保育そのものから頂く貴い賜物であり、これなしでは保育に「没入」することができない要となるものではないかと思われれます。

現代において、総合的に目に見える成果を求めることが困難な保育を「評価」することの難しさは依然としてあると考えられます。そのような現代に、「保育の味」は何かを示すのではないのでしょうか。

幼児の帰った後のしじま

倉橋惣三

(一九五二(昭和二十七年)年 第五十一巻第七号)

保育は幼児の帰ると共に終る。しかし、先生にと

って大切なのは、その後である。し、ま、な、ん、て、気  
どった時間がある訳ではないか、お、か、え、り、さ、よ、う  
な、ら、の、後、し、ば、ら、く、小半ときか、そのどや／＼のお  
さまった一とき、あたりがしいんとする時がある。  
先生のほっと息をするときであり、ひとり椅子に  
からだを投げるときであり、だまって目を閉じると  
きであり、ぼんやり窓から外を見るときであり、な  
んということもなく庭へ出てぼつねんと木の下に立  
つときもある。なにも一々さういうしぐさをする  
ときという訳ではないが、動きづめのからだに、ち  
よっと憩いが与えられ、子供を見るにのみ忙しかつ  
た目が内に向き、子供を追っていた心が自分という  
ものに帰る時間である。

それが余り長くなると、眠りに落ちて仕舞うこと  
もあるがまどろむでもなく、沉んやぐっすりでもな  
く、うっとりとして、保育の酔いを味う瞬間といおうか。  
快いというも強すぎる。楽しいというも興じすぎる  
が。

保育の味は元来が淡いものである。中に甘味も苦

味も含まれていながら、そのあとあじの淡さは、よ  
い茶の服後に似るべきものである。茶の味は飲んで  
いる間よりも、残る後味にある。一滴の玉露でも、  
大ふくの濃茶でも、味わうともなきおのずからな後  
味が貴い。それを、あわたゞしく座を立てては惜し  
い。

保育も、といって、素より、その香味の質もその  
味わい方も一つではないが、子供たちの帰った後の  
一ときの貴さという点に変わりはない。そうして、そ  
の後味を粗末にする人とは共に保育を語りあえない  
と、いってよからう。

保育が幼児のために何を残すかは、素より大切な  
ことである。がまた、保育が日々にわれらに何を残  
すかも貴重なことである。朝に保育の目的と企画が  
あり、昼に保育の過程と実際があり、その過程と実  
際に、幼児と一つに我れを忘れる没頭があり、かく  
て、保育のために働くわれらの日々が過ぎてゆく  
のであるけれども、われらは、その、たゞに過ぎゆく

ことだけでい、ものだろうか。残すものは、たゞ幼児への業績だけであって、ものだろうか。保育三年、われに何が残るのだろうか。保育五年、われに残るものは何んであるだろうか。而して、保育十年、たゞその業績の記録が残るだけでい、だろうか。その業績も、小さいものでは決してないが、必ずしも著しいものではなく、とり立て、大に酬いられるものでもない。少くも、あまり大きく酬いられると思つたら、恐らく失望させられることも多いであろう。根を培うものは必ずしも思い通りの大輪を期待し難く、希望通りの果実を収穫し得ないかも知れないからである。少くも一日々々の保育の業績を重ねてわれひと、目をみはることはできないであろう。残るものは、日々に味う保育の香の、忘れ難い思い出である。後に残るとも知らなく、人に告げようもなく、その日その日に快よい酔い心地こそである。

快よい酔い心地というけれども、その快さの中には、疲れもあり、苦勞もあり、一人々々の子供に済

まなかつたと思う悔恨もないではない。うっとりとしたし、まの中に、浮び出てくるものは、幼児のあの笑顔であると共にあの泣き顔である。馳けぬけて得意な顔であると共に、すべりころんで泣面つくる顔である。寄り添うてくるまるい肩と共に、時には不機嫌に淋しい背を見せて馳けて去る後ろ姿がある。今頃はあの町を、足踏み鳴らして帰ってゆくと思ふ子を追いかけて、後ろからその肩に手をかけたくなることもある。今頃はあの畔道を、とぼくとひとりゆくと思ふ子に追いついて、さっきの不愛想を詫びたくなることもある。なぜそんな歌い方をするのと叱つておいて、すぐそのあとから自分でも歌いそこなつた失敗を、ひとりで可笑しくなることもある、やめない泥いたずらをやめさせようとして、却つて子供のエプロンを泥だらけにした不手際に、ひとりできまり悪く思ひ出すこともある。こまかくは、あのときの返事の気のなさ、答え方のまずさ、子供とした約束を、うっかり忘れていたこと、子供の喧嘩に気短かな仲なおりをさせたこと、あれやこれや、

人知れず頬をあかめることもある。しかも、それらがどれも、これもひきくるめて、ほんのりと保育の香を味わせてくれるのである。敢て、保育の反省といわない。保育の経験ともいわない。初夏の風かおる午後そういう貴いし、まが、先生方によくあるのである。

このし、まから、ふとわれに帰って、保育室のあとかたづけが始まる。あすの保育の準備が始まる。——帰りを急ぐ先生や、すっかりぐったりしている先生や、お稽古ことや、アルバイトに気をとられ勝ちの先生達には、保育が忙しい仕事としてあるだけだったり、往々にして片手間仕事として行われるだけだったりする。——あじけない一日々々ではある。

最後にもう一編、上記の二編の間に発表された、「保育の味」(一九四七年)をご紹介します。日本的性格を持ち翻訳不可能と言われる倉橋の言葉から、日本の保育を味わうひとときを今少し過ぎ過ぎていたできれば幸いです。

## 保育の味

倉橋惣三

(一九四七(昭和二十二年) 第四十六巻第五号)

保育の必要は誰れでもいう。保育の目的はきまっている。保育の原理と方法は研究者が考える。たゞ保育の味だけは、幼児保育の日々の実際家のほかに分らない。

教育は人と人とのふれあいなしに出来ない。保育は殊に、懇な、こま／＼しいふれあいである。保育の味は、そのふれあいにのみ味われる。保育の実際はむつかしくもあり骨もおれる。決してらかな仕事でもなく、或る意味に於ては苦勞の連続である。しかもその労苦の間に、しみ／＼とした味わいがある。保育の味は必ずしも甘いと限らない。苦くもなく辛くもないが、よそからおもうように甘ったるいものではない。しかし、一旦味ったものには忘れられない味である。保育實際家はその忘れられない味、



味わわずにいられないみりよくに引きつけられて、毎日毎日の保育をする。

この味をぬいて、保育は、必要論と目的論と原理論と方法論との殻になる。ことよつたら、味のなिकासに止まるかも知れない。そんなことで、保育実際家は、ほんとうに保育に没入し得るものでない。

この味は自分で味わ、なくては分らない。多分相当の年月を重ねなくては分らない。更に、恐らく保育というよりも幼児に苦勞しなければ分るまい。たゞし、年月を重ねている中に味のぬけることもあろうし、苦勞している間に味のすりへらされることもないといえない。

味は人にもいえぬ。人知れぬ楽しさである。この味を楽しむゆえに、保育実際家は自ら自分を幸福とする。人に認められなくとも報いられなくともその幸福に生きる。

終りに念のためつけ加える。味々といつて幼児をなめるのではない。なめてか、つてはならないし、なめ可愛がりなどをしてはならない。楽しさといつ

て、世の常の浮いた楽しさでないことはもとよりである。保育実際家同志は、この味、互にだけ分るこの味がいつも話しの中心になる。そしていつでも互の幸福を語りあつては別れる。

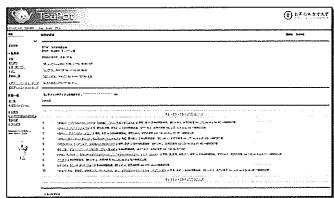
\*旧字体は新字体に、歴史的仮名遣いは一部現代仮名遣いに改めました。—編集部—

注 倉橋惣三『育ての心』フレール館 二〇〇八年

幼児の教育 バックナンバーを  
WEBページで公開中

「幼児の教育 TeaPot」で

検索 



<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/52377>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成23年発行の第110巻第4号までご覧になれます。

シリーズ  
子どもが育つ  
場所から

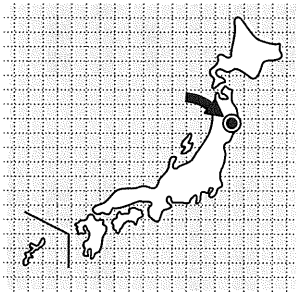


# お母さんが元氣であることが保育の原点

あおいとり幼稚園（岩手県盛岡市）

子育ても仕事も頑張る女性が増えているとはいえ、家庭の内外に問題はまだまだ山積みです。

「認可外だからこそできる保育を考えよう」  
逆転の発想の保育施設を紹介します。



今号のレポーター

武田京子

岩手大学教育学部教授。専門は保育学(児童文化・家庭教育)。自分の時間ができたら、読み聞かせ活動に参加したいと思っています。

十年ほど前、初めてあおいとり幼児園の存在を知った時、「年中無休、二十四時間保育をしている無認可保育所」というキャッチフレーズから、劣悪な保育環境が連想されて、あまり良い印象を持つことができなかった、というのが本音なのです。それを大きく変えたのは、園長先生が、社会人学生として私の勤務する大学に入学し、授業やゼミ活動を通じて、盛岡の保育事情や幼児園の教育方針、詳しい保育の内容を知ることとなったからです。

待機児童、延長・休日保育などのさまざまな問題が山積している現在、あおいとり幼児園の保育システムから学べることは多いのではないかと考え、紹介してみたいと思います。

## あおいとり幼児園とは

あおいとり幼児園は、平成十年七月、園児五名の託児所として、空き家になった貸家を利用してスタートしました。二十四時間対応・年中無休をうたつてはいるものの、利用者は「家事をおろそかにしな

い」程度の片手間のパート勤務を希望する人が多く、利用時間は午前九時から午後三時までが大半でした。しかし、平成十五年ごろ、認可保育所の保育時間と勤務時間が合わないという理由から、教員、医療従事者、企業の管理職の利用者が急増しました。さらに、離婚による一人親家庭の利用者も増え、近くに大型ショッピングモールができると、土日の保育の要請も増えてきました。

そこで、平成十八年、個人経営の託児所から会社組織の保育事業として、小学校就学前までの最低限の教育を施す、より充実した体制をとるようになりました。現在は、小学校三年生までの学童保育を行う「キッズ」を併設しています。

## いよいよあおいとり幼児園へ

あおいとり幼児園に伺うのは三年ぶりくらいです。約束の十二時ごろ、以前、中心として使われていた園舎に行ってみると、建物はそのままなのですが、他の名前の会社になっていて慌ててしまいました。

連絡を取って、無事たどり着いた第二園舎では、お昼寝の準備に保育士さんも子どもたちも、大わらわでした。楽しみにしていた「縦割り保育」の象徴のような、年上の子が小さい子を寝かしつけるところが見られず

残念でしたが、早々に失礼して、車で二、三分の学童保育の場所に伺うことにしました。

こちらはちようどランチタイム。夏休みに入ったところなので、ひまわり組（年長さん）は、小学生と一緒にお昼のサンドイッチを食べているところでした。あおいとり幼児園では、「縦割り保育」が教育方針の一つで、年長の後半に近づくと、小学生と



▲お姉さんは寝かしつけるのが得意です

の活動の機会が増えます。子どもたちの中に小学校へ行くことが具体的にイメージされ、「小1プロブレム」の心配などありません。日々の活動の中にも機会をとらえて異年齢の交流の場があり、保護者からの評価のよりどころになっています。

保育施設というと、「まず園舎を建設する」と考えがちですが、ここは、園児数を考えて無駄のない経営をするため、使用に差し支えない空き店舗などを利用して、保育施設としています。現在は、年齢別に分けた保育所二か所と学童保育の、合わせて三か所で活動しています。倉庫だった所に床材を張った第一園舎、ほとんど使用されなかったベット病院の第二園舎、学童は、以前はレストランとして使われていた、地下のスペースを使用しています。子どもの遊び場として地下室を使用することに首をかしげる人もいると思いますが、子どもたちには、幼児は許されないけれど、小学生の「キッズ」になれば許されるという、一種のステイタスとしてとらえられているようです。

## 園長先生ご夫妻へのインタビュー

場所を変えて、園長先生ご夫妻に、今までに感じていた疑問についてお伺いすることができました。発想の柔軟性は経営の全般にも反映していることがわかりました。

——お久しぶりでですね。震災の時は大変でしたか？

三月十一日震災当日は建物の被害等はありませんでしたが、停電のため暖房が使えず、保護者のお迎えが来るまでしばらく送迎バスの中で暖をとりました。地震に驚いてすぐ迎えに来る人もいましたし、いつもより早く、十七時までに約三分の一が降園しました。介護・看護・医療の方は二十時までお迎えに来ることができず、ポット型の石油ストーブを囲んで、お迎えを待ちました。

とりあえず十二日、十三日を休園としましたが、医大に勤務している方から要請があり、お弁当持参を条件に、子どもたちの受け入れをしました。休園

ですから、保育士たちもお休みにしたのですが、面白いことに、「保育に参加したい」「あおにとりに行つたほうが安心できる」という声が上がりました。「いつもと同じ」普通生活を送るということがとても幸せで、みんながここに一緒にいるということが素晴らしいことだ、と再確認し合えた機会でもありました。

震災をきっかけに、保育そのものには変化がありました。被災地から移住してくる方、被災地の実家に戻る方、仕事打ち切りになる方もありました。残った保護者の方たちと今後の保育につい



▲園長先生ご夫妻と子どもたち

て話し合い、二十四時間はやめるけれど、年中無休は維持すること、送迎バスは廃止としました。

——それはなぜですか？

震災直後、連絡が取れないことが、保護者にとつて大きな不安となったのです。送迎バスが津波にのまれた報道も、保護者の不安の原因の一つだったのですね。

——震災の前に関東地方へ事業を拡大する話がありましたか、そちらのほうはどうなりましたか？

スタートは遅れましたが、埼玉県の川口市に、あおとり幼児園を開園できることになりました。

——なぜ、関東の埼玉県で行うことになったのですか？

盛岡でも少子化が進み、園児数は現状維持のまま保育を行い、新しい模索を始めていました。頻繁に耳にする、関東地方での「待機児童問題」について

私たちなりに何か協力することはできないのか、と考えているところでした。ちょうどそのころ、看護の仕事のキャリアアップのため関東地方に転居した保護者の方から連絡が入ったのです。「二人の子どもを認可外の保育所に入れるのに、ひと月十二万円もかかりとても大変です。あおとり幼児園をこつちでもやってもらえないでしょうか」という内容でした。

そこで、盛岡のスタート時と同様に、空き住宅を借り、園庭の代わりに近所の公園を利用してスタートさせたのです。保育料は盛岡と同じです（参考）四万四千円・給食費を含む。延長保育料なし。公園で遊ぶ保育士と子どもの姿を見て、入園希望者が出てきました。認可保育所に入りづらい外国籍の子どもたちもいて、食事や子どもの名前などのカルチャーショックも経験しました。

今は、とても広い、住宅メーカーのショールームだった場所に移転が決まり、八月に正式に開設をすることができそうです。

——埼玉のあおいとり幼稚園も、今までの保育を行うののですか？

もちろんですよ。認可外のみまで保育をするのは、土日の保育をするためと、今までの教育方針を保持したためです。もちろん、認可を受ければ補助金も下りるので、財政的にはゆとりは出ますが、さまざまな締め付けも出てきます。あおい通りの考え方を尊重してくれる保護者だけを集めたい、というのが本音です。

——あおい通りのホームページには、

「常に預ける保護者の方の立場を考える」

「子どもたちの健康と安全を考える」

「基本的な生活習慣を身につけさせる」

「子どもたちの可能性を引き出していく」

の四つが挙げられていますが、具体的にはどんなことでしょうか？

「お母さんが元気でなければ、子どもも元気になれない」ということです。何といっても子どもを育て

る中心に居るのは、お母さんです。でも、間違えないでくださいよ。お父さんは子育てにかかわらなくてもよいということではないのです。お母さんの心の安定には、絶対にお父さんが必要です。子育ての協力者であると同時に、お母さんの理解者であることが必要なのです。お父さんとお母さんが仲良くなければ、子育てはうまくいきません。ですから、お父さんとお母さんが

デートできるように、と私たちは率先してお子さんを預かります。

また、保護者の方たちを集めて、「お話し会」というような育児講座も行っていきます。別名「育児書には書いていない子育てさほり講座」



▲お話し会の様子

ですが、この話を聞くと皆さんは、ほっと肩の力が抜けて安心するようです。

——年配の保育士さんが多いように見受けませんが、訳があるのですか？

保育士を選考する時、若い人よりあえて年配の方々を選んでいようなどころはあります。資格を持っていることはもちろん大切ですが、子育て経験を含めた社会経験・人生経験を財産としてとらえたいと思っているのです。とはいうものの、経験の上にあぐらをかいてしまつて、それを振りかざすようになっては困るので、育児講座の基本になつていて、新しい子育て観を理解してもらえよう、常に研修をしています。

——あおいとりの「縦割り保育」はどのように考えたらよいですか？

私たちは、これからの時代に求められるものとして、「人を思いやれる心」と「自律・創造できる力」を考

えています。この「人を思いやれる心」のところでですね。きょうだいの数が減少して、家庭内でも幼い子どもの世話をする機会が減り、年長の子どもがどのように行動しているのかを学習する機会も減っています。

一般の幼稚園教育の活動は午前中の活動の中に組み込まれています。小さい子のお世話の日に

を組み込んで、おむつを換えたり、お散歩の時に小さい子の手を引いて安全を確保する配慮をしたり、お昼寝の時に寝かしつけることも経験するのです。



▲大きい組と一緒にのお散歩





## これまでの保育を振り返って

齊藤雅子  
(幼稚園教諭)

私が幼稚園教諭として仕事を始めてから、今年度で九年目となりました。幼いころからの夢をかこなえていきました。今回、このような「私の保育ノート」への執筆の機会を頂き、改めて自分自身の保育を見直してみたいと思います。

## 一年目を振り返って

一年目、念願の幼稚園教諭になることができ、子どもたちが笑顔で「先生」と呼んでくれることがうれしい毎日でした。しかし、それと同時に、「先生」ということの意味をさまざまな面で感じる一年でも

ありました。

一年目は、先輩の先生と二人で年少組の担任となりましたが、それまで子どもたちとかわるといえば、学生の時の保育実習ぐらいだったので、子どもたちに「どう声を掛けたらよいのか」「どう接したらよいのか」がわからず、言葉掛けの一つ一つに悩んでいました。また、クラスでの活動で私がリーダーとなり保育活動を進めようとしても、子どもたちとうまく活動内容を伝えられない、まとまらない、ということが多く、一学期が終わるころには、できない自分が悔しく、涙を流す毎日でした。一緒に担任をしていた先輩の先生の言葉の掛け方、保育の進

め方を必死に観察し、遊びの場面では、他の先生と子どもたちのやりとりにも耳を傾け、どうにか自分のものにしようと必死だったことが思い出されま  
す。喜びと共に悩みの尽きない毎日を、先輩の先生  
方のお力を借りることで乗り越えられ、あきらめず  
に「先生」という仕事を続けられたと思います。

## 障がいのある子の一年

二年目に入り、私はクラス担任としてではなく、  
フリーの立場となり、さまざまなクラスへ補助とし  
て入ることになりました。その一年で障がいのある  
子とかわかることになり、私にとっては一年目に続  
き、「初めて」の経験ばかりでした。

年長児だったその子は「アスペルガー症候群」を  
持つ子で、障がいの理解から始まり、その子とのか  
わり方や、クラス活動にスムーズに加わることが  
できるようにと、担任の先生と相談し合ったり、試  
行錯誤の日々でした。一対一でのかかわりも多く、

気持ちを言葉でうまく表現できないその子に対し  
て、どう接していいかわからず、時には強い口調で  
指導してしまうこともありました。気持ちに余裕を  
持たずにいることを反省しながら、その子と同じ目  
線に立つことをまず第一に考えました。その子の気  
持ちをくみ取ること、それを代弁しながら次の活動  
に興味を持つってもらうこと、どのような言葉を掛け  
るのがよいのか……など、一つ一つが勉強でした。  
その子との出会いがあったからこそ、「子ども一人  
ひとりをしつかり見つめ、その子に合わせた保育」  
の大切さを実感することができました。

## 初めて一人でクラスを持つ

四年目、初めて一人でのクラス担任となり、期待  
と不安の中でスタートしました。今まで自分が学ん  
だことを生かし、「こんな保育がしたい」「こんなク  
ラスにしたい」と張り切っていたことを覚えていま  
す。それと同時に不安も大きかったのですが、それ

を子どもたちや保護者の方に見せてはいけない、と  
気を張りつめていました。初めて一人で担任をする  
ということ、日々の保育がうまくいかなかったり、  
保護者の方とのかかわり方に悩んだり、悩みの尽  
きない中でも励みになったのは、やはり子どもたち  
の存在でした。一日の終わりに、「今日も楽しかつ  
た!」「先生、面白かったね」と笑顔で応えてくれ  
る子どもたちがいたからこそ、その一年を無事に終  
えることができたと思います。

その一年で、私には忘れられない出来事がありま  
した。年長児を受け持っていたため、最後の大きな  
舞台「卒園式」を終えると、ある保護者の方から、「先  
生、初めての担任で不安でしたよね。でもうちの子  
は、先生が大好きで、この一年間、一度も、行きた  
くないと言うことはなかったですよ」と声を掛けて  
いただきました。それまでにもうれしいこと、楽し  
いことはいっぱいありましたが、その言葉のおかげ  
で、一年間張りつめていたものがすべてなくなり、  
「幼稚園に行きたくないと言うことはなかった」と

いう言葉をうれしく感じ、そして、その言葉の重要  
さも感じた出来事でした。また、「幼稚園って楽し  
いな! 毎日行きたい!」と子どもたちみんなに思  
ってもらえるように、今後も頑張っていこう、と改  
めて決意する出来事でもありました。

### 初心を思い出す一年

今年度に入り、まだまだ未熟な私ですが、新任の  
先生と一緒にクラスを担任することになりました。  
私も緊張しながらのスタートでしたが、新任の先生  
はもつと緊張したスタートだったと思います。私も  
一年目を思い出し、互いに相談し合いながらの毎日  
ですが、新任の先生と一緒に過ごしていく中で、保  
育における大切なことを忘れていたと感じることが  
多くあります。一人ひとりときちんと向き合おうと  
する姿勢、この仕事に就きたいと思った原点など、  
私自身も一年目に持っていた思いを再び思い出しな  
がら過ごす毎日です。今年度は、私自身も新任の先  
生と同じく、初心に帰り、子どもたち一人ひとりと

深くかかわり、楽しく過ごしていきたいと思っ  
ます。

私が「先生」として子どもたちと接していく中で、一番大切にしていることがあります。もちろん大切なことはたくさんあると思いますが、私は「言葉掛け」を最も大切にし、接してきました。「先生」は子どもたちにとって、手本でもあり、子どもたちの生活そのものにかかわる存在だと思います。そのため、子どもたち一人ひとりの性格や思い、感情をしつかりと受けとめ、その子に合わせた言葉掛けが必ずやだと思ひ、日々接しています。

「子どもが笑顔になれる言葉掛け」を目標に、これからも勉強していきたいと思ひます。

最後に……私は学生のころから地元の岩手県を離れ、青森県で今現在、仕事をしています。本園の職員の皆さんに支えられてきた九年間だったと思ひ

ます。知り合いもない中、「先生」としてスタートしましたが、先輩の先生方には、お母さん・お姉さんのような存在として何でも相談できる安心感があり、後輩の先生とは、妹・弟のような存在で、意見交換しながら共に学んでいこうという関係を築いていけることなど、園全体が温かい家族のようであることに感謝しています。

今までに出会い、たくさん笑顔と喜びをくれた子どもたちに「ありがとう」の思いを込めて、またこれから出会う子どもたちとの楽しい出来事に胸を弾ませ、笑顔あふれる日々となるよう、今後も励んでいきたいと思ひます。

# 私の保育ノート

## 変わるもの・変わらないもの

森藤郁子  
(保育士)

一昨年の四月から愛育養護学校で働いています。私は愛育という名前を今まで見たことも聞いたこともなく、初めて訪れた時もすでに春休みで、子どもたちには会えませんでした。

「いったいどんな毎日なんだろう?」と思い巡らせてみても、やはりうまく想像できませんでした。

愛育での生活が始まり、子どもたちとそれなりに一日を過ごすことができて、何となく私の気持ちには疑問符がついたままでした。「養護学校」という言葉に、何か特別なかわりをしなくてはいけないと思っていたのかもしれませんが。

そんな日々を繰り返すうち、自然と自分が保育を

始めたころのことを思い出していました。

会社員から保育の仕事に転職した私は、それまで保育経験がまったくありませんでした。当時は資格も持っておらず、先生方に「子どもと遊んでいてください」とよく言われ、暇さえあれば遊んでいました。鬼ごっこ、ブロック、折り紙、ままごと……子どもたちは何でも教えてくれました。それはもう楽しくて楽しくて。一日があつという間でした。

愛育養護学校に勤めることになり、そこで突然に始まった生活は、子どもたちと私が始まる「今」しかなく、それならばできるだけ楽しい「今」と思

森藤郁子(もりとうくにこ)

保育士、保育園給食調理員、幼稚園での子育て支援(ブレ保育)を経験。現在は愛育養護学校勤務。

うようくなりました。私の中から疑問符が消え、愛育での毎日が少しずつ変わっていきました。

ある日、帰宅すると、小学校四年生だった娘が、「今日はどうだったの?」と聞いてきました。

娘は保育中の子どもたちの話が面白いようで、いつも聞いてくるのです。その日の出来事を話すと、ひとしきり笑った後、

「ねえママ。その子たちって何年生なの? どこがしょうがいなの?」と言いました。

「うーん……。どこがしょうがいなんだろうね?」と私は答えました。

確かに、目に見えることは違うかもしれませんが、でも、夢中で遊ぶ姿も、「これやりたいんだ」という一途な気持ちも、あきらめず何度も挑戦する姿も、私が今まで出会ってきた子どもたちとどこも変わらなかつたからです。

愛育で、ある男の子が物理や宇宙の話をしてくれました。その時は、昔、保育園で出会った小さな博士たちを思い出しました。虫博士・電車博士・石博士・折り紙博士、たくさんの博士たちがいました。彼らのあまりの詳しさに「ほお」「へえ」と圧倒され、「好き」というエネルギーが、作品や説明になつてあふれ出てくるようでした。聞くだけでもとても楽しくて、私も博士になつたような気がしました。

言葉が話せない子どもたちは、身体で語ります。抱いていた子が、自分で見つけた葉っぱを取ろうと手を伸ばします。指先と手首に力が入り、それでもなかなか取れずに葉っぱとの綱引きが始まると、腕に背中に、しがみつくと手や足にも力が入っていきます。その意志の強さが、硬くなった身体を通して私に伝わってくるのです。

これは愛育での出来事ですが、言葉として表れなくても、身体を通して感じる会話のようなもの、相手

の思いというのは愛育での子どもに限らず、子育てでも保育場面でも、触れることで感じ取れるものがあるのではないのでしょうか。私はそう思っています。

保育園や幼稚園では、「絶対にいやだ!!」と泣き続けたり、気持ちを簡単に許さない子どもたちに出会います。それでもそーっとそーっと隣にいと、ゆっくりゆっくり隣にすることを許してくれる、少しずつ気持ちも身体も距離が縮まっていく、待っている、子どもたちとの大切な時間がありました。私はあの時間の流れが好きでした。

その時間がよみがえってきたのは、愛育で、ある男の子に出会った時でした。彼は真つすぐ見つめる目がとても印象的で、私の一瞬の緊張も、あらゆる気持ちも、すべて見透かされているようでした。私は戸惑いました。

でもすぐに、彼とも、あの時泣き続けた子どもたちが教えてくれたように、ゆっくりと時間を積み重ねていけばいいのかな、と思えるようになりました。彼

と出会って一年。今では一緒に過ごす時間は、たとえ短くてもとても楽しく、温かい気持ちになります。愛育のどの子と遊んでいても、やっぱり今まで私が出会ってきた子どもたちの顔が浮かんできます。まるで若葉のように光を受けて風を受けて真つすぐに伸びようとしている、みんなそんな力を持っています。それは本当に何も変わらないと思いました。

保育という仕事をしている私にとって、忘れられないことがあります。

「先生たちには、私の気持ちは絶対にわからない」と、あるお母さんに言われたことです。別に怒られたわけでもなく、自分の子育ての何気ない思ひ出話をしている中で、ふっともらしたのです。その子はダウン症でした。話を聞いていたその瞬間、この言葉はすつと私の中に入り込んできました。

私はその時から、この言葉を忘れたことはありません。忘れないというよりも、身体の中にいつも「ある」という感覚です。そしてずっとずっと考



えています。

「わかる」とは何かということ。

考えても考えてもわかるはずもないのですが、ただひとつだけわかったことがあります。

「わかった」なんて簡単に言うことではないんだ、簡単にわかつちゃいけない人の気持ちがあるんだ、ということ。

それをすべてわかるうなんて、決してできないし、できるつもりでも、それはかつての私がそうだったように、「わかつたつもり」なのかもしれません。

だから、せめて子どもたちにとつても自分にとつても、新しい何かに気付けるといいなと思っています。自分にわかるだけのことを新しい気付きによって少しずつ増やしていく、そしてまた繰り返してわかることを増やしていく、それしか私にはできないのです。保育はわからないことばかりです。わからないから、子どもたちが身体中から伝えていることを学んで、自分に問い続けるしかないと思っています。

今日仲間に入れてくれてありがとう。

あなたのことを教えてくれてありがとう。

いろんなことを気付かせてくれてありがとう。今日私はあなたに少し近づけましたか？

あなたの思いに少しでも近づけたでしょうか？

そんな思いで子どもたちと遊んでいて、一緒に笑い合えた時、どんな距離をも飛び越えたような気がして、本当にうれしくなるのです。どんな子だって笑顔は子どもたちによく似合います。

五年生になった娘は、相変わらず、

「だからさー。ママの話聞いてると、まったくどころがしようがいなのかわかんないんだよねー。しようがいつて何なの？」と言っています。話しているほうもわからないのだから当たり前です。でもいいのです。その答えはいつかきくと、たくさんの子どもたちが教えてくれると思っていますからです。

# 保育の世界を豊かに 生きる子どもたち ④

「会話すること」と  
「みんなの前で話すこと」における子どもの生

榎沢良彦  
(大学教員)

幼稚園・保育所から小学校への接続が強調されるようになり、保育において「言葉で伝え合うこと」や「みんなの前で発表すること」が意図的に行われるようになってきた。これらのねらいは、コミュニケーションの能力を育てることにある。確かに、これらの取り組みにより、子どもたちは上手に発表することができるようになる。しかし、そのことが、子どもたちが仲間とのかかわり(言語生活)を生きたことにどのような意味を持つのかについては、ほとんど意識されてはいない。果たして、子どもたちは、人に話すことや人の話を聞くことにおいてどのような体験をしているのだろうか。今回は、遊びの中で友達と話すこと(会話)とみんなの前で話すことを取り上げ、体験の相違を考えてみたい。まず、ある幼稚園の年長児クラスでの出来事を紹介しよう。

この日、子どもたちは「フェスティバル」のテーマの下にそれぞれ遊んでいた。室内では

榎沢良彦(えのさわよしひこ)  
東京家政大学家政学部教授。  
保育の世界を当事者がどのように生きているのかを考え  
ています。著書:『生きられる保育空間』(学文社)。

「編み物」「映画館ごっこ」、外では「玉乗り」「ブーメラン」「的当て」などが行われていた。テラスで、K夫とM子が玉乗りをしている。M子のほうが長い時間やっており、K夫は待っている時間が長い。しかし、身体は玉乗りコースの上であり、M子と会話している。M子には交替したくない気持ちもあるのだろうが、K夫に「一緒に乗ろう」と誘い、二人で玉乗りをする。しかし、無理だとわかり、K夫のほうが降りて待つことになる。

「お知らせタイム」になり、子どもたちがテラスに集められる。担任が子どもたちに「みんなに知らせたいことのある人は前に出て言ってください」と言う。最初に、T夫が前に出てみんなの方を向き、「あそこで玉乗りをしているので来てください」と言う。表情は硬く、いかにも緊張している様子である。流れるような話し方ではなく、ぎこちない感じである。座って聞いている子どもたちの中には、隣同士でしゃべっている子どももいれば、注意を向けて聞いている子どももいる。N夫は「今度玉乗りに行こう」とつぶやく。T夫に続いて、他の子どもたちも、自分の遊びを実演して紹介する。やはり緊張した面持ちである。一方、見ている子どもたちはリラックスしている様子で、誰がうまいとか下手だとか、気楽に実演を評価し合っている。「お知らせタイム」が終わると、それまで人気のなかった「映画ごっこ」や「玉乗り」に子どもたちが集まります。

M子とK夫は遊びの中で会話をしている。玉乗りに参加している者同士として、この二人の間には身体的に応答し合う関係が生じている。それ故、二人の間には自然な気持ちの交流が生じる。すなわち、「わかり合う」という事態が生じるのである。二人がわかり合っている

る故に、M子がK夫に「一緒に乗ろう」と誘いかけることが起きるのである。この言葉から、M子がK夫の気持ちを察していることがわかるが、それは知的判断によりなされたわけではない。気持ちの通じ合いを通して、K夫の気持ちがM子にじかに感じられるのである。「一緒に乗ろう」という言葉は、気持ちの通じ合いの中から自然と口をついて出た言葉なのである。このように、遊びの中でなされる会話においては、子どもたちは自然な流ちょうさの感覚をもつて、相手に対して言葉を発することができる。ところが、人の前に立つて話をすることになる、会話におけるのは全く異なる事態が子どもの身に生じてくる。

「お知らせタイム」で、みんなの前に立つて遊びを紹介する子どもたちは、座って聞いている子どもたちとは全く異なる在り方をしている。話し方はぎこちなくなり、身体全体が緊張感に満ちている。緊張した身体は相手の身体に対して柔軟に応答することはできない。それ故、身体的行為である話すことも、不自然なものになるのである。

みんなの前に立つ子どもの行為が不自然になるのは、みんなに見られているからである。見られることにより、子どもは「他者に見られている自己」を意識する。それは、相手と自分とが「見る主体」と「見られる対象」とに分離されることを意味する。対象化された子どもは見る主体により拘束され、自由に存在する権利を奪われる。それ故に、みんなの前に立つ子どもは、聞いている子どもたちとの間で自然な会話を楽しむことができなくなるのである。それに加え、次の事情が子どもから自然な流ちょうさを奪う。

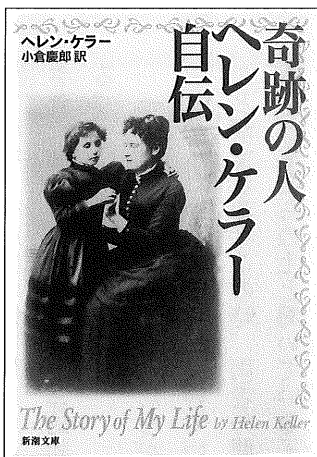
みんなの前で話をする子どもは、「遊びをみんなに紹介する」という目的を果たすことが

求められる。それ故、その子は目的が達成できるように言葉を考え、選ばなければならぬ。すなわち、みんなの前で話をする子どもは自分の話し方を意識しながら話すのである。意識された話し方は相手との身体的相互応答の流れから切り離される故に、ぎごちないものになる。

一方、聞いている子どもたちが遊びを実演する子どもを「うまい、下手」と評価していることからわかるように、聞いている子どもたちは前に立っている子どもを対象化して眺めることができる。この時、両者の間には相互に応答し合う関係は生じない。すなわち、話をする子どもたちの生と聞いている子どもたちの生は別々の生として流れるのであり、両者の間に気持ちの通じ合いは生じないのである。それ故、聞いている子どもたちは話している子どもがどのような心情で話しているのか感じ取ることはない。単に、話の内容だけを理解し、情報を得るのである。そして、その情報が興味を引かれるものであれば、子どもたちは行動する。「映画館ごっこ」や「玉乗り」に子どもたちが集まりだしたのは、まさしく子どもたちが情報に興味を引かれたからである。

このように、遊びの中でなされる会話と、みんなの前で話することとは、子どもたちの体験は全く異なっている。前者では子どもたちは共同の生を生き、「気持ちを通じ合い、わかり合っている」ことを基盤として、自然で流ちょうな言語的応答（身体的応答）を展開する。後者では、聞く者が話す者を対象化するとともに、話者は自ら自己を意識する。それ故に、話す者はぎごちない話し方をせざるを得なくなり、情動的・心情的なわかり合いを欠いた形での情報の授受が展開されるのである。

— 終わり —



『奇跡の人 ヘレン・ケラー自伝』  
新潮文庫  
ヘレン・ケラー著 小倉慶郎訳  
(新潮社 2004年)

## “奇跡の人”とはだれか 『ヘレン・ケラー自伝』

評者

佐治 恵  
(塾講師)

巨匠によって書かれ、無数の読者の吟味に耐えて読み継がれてきた作品を「古典」と呼ぶなら、ここに取り上げる『ヘレン・ケラー自伝』は古典の名にふさわしくないかもしれない。作者はまだ二十代前半の若い女性でこれまで著作経験は皆無である。

ただ、一つの条件が満たされればこの作を古典の列に加えることができるように思う。それはヘレンの個人的な（それも盲と聾という条件が与える特別な）経験が、それゆえに価値があり人を感動させるということではなく、むしろ全く逆に、それが万人に開かれた普遍的な経験であることによって、古典の名を得ることなのである。

\* \* \*

先生と私は、井戸を覆うスイカズラの香りに誘われ、その方向へ小道を歩いて行つた。誰かが井戸水を汲んでいた。先生は、私の片手をとり水の噴出口の下に置いた。冷たい水がほとばしり、手に流れ落ちる。その間に、先生は私のもう片方の手に、最初はゆっくりと、それから素早く water 綴りを書いた。私はじっと立ちつく

し、その指の動きに全神経を傾けていた。すると突然、まるで忘れていたことをぼんやりと思い出したかのような感覚に襲われた——感激に打ち震えながら、頭の中が徐々にはつきりしていく。ことばの神秘の扉が開かれたのである。この時はじめて、WATERGATEが、私の手の上に流れ落ちる、このすてきな冷たいものことだとわかったのだ。この「生きていることば」のおかげで、私の魂は目覚め、光と希望と喜びを手にし、とうとう牢獄から解放されたのだ！

(小倉慶郎訳 新潮文庫)

本編中、最も知られた場面であろう。ヘレンは突然 WATERGATE を、いま、手に受けているこの水のことでと悟る。彼女は自分の身に起こったことを、どう説明してよいか分からない。ただ「忘れていたことをぼんやりと思い出したかのような感覚」と記すことしかできない。そんなつかみどころのない出来事であるのに、この場面を知った者はだれもが、なぜかこの出来事が忘れられないのだ。どうしてだろう。私はそれを上記のように「それが万人に開かれた普遍的な経験」であるからだと考えたい。

それは二人の師弟の絆が持つ普遍性なのだと長く考えられてきた。おそらく作者のヘレン自身もそう考えていた。だがそれでいいのだろうか。

\* \* \*

この場面をクライマックスに据えた一九六二年の映画が、アーサー・ペン監督の『The Miracle Worker』(日本語題は『奇跡の人』)である。サリバン役で出演したアン・バンククロフトはアカデミー主演女優賞、ヘレン役のパティ・デュークも同助演女優賞を受賞している。まるであの「師弟の絆」がそのままハリウッドの評価につながったかのように。冒頭、真っ白なシーツが庭いっぱいに干された間をまさぐるように歩むヘレンの姿は、白黒画面ならではの美しい映像である。あたかもその場面は、無垢なヘレンを象徴するかのようで純粹に美しい。だがこうも考えられる。この無垢の白さは、ヘレンの内面がまだ空虚な白紙状態であることを意味するのだと。まだ何も書き込まれていない白紙(タブラ・ラサ)としてのヘレン。そこに物語を書き込みに来

るのがサリバンのというわけだ。

自身、弱視の障がいを持ち、病弱な弟とともに孤児院で（おそらく体罰を含む劣悪な環境で）育ったサリバンの、弟の不幸な死の記憶を抱えたまま、単身、見知らぬ南部の土地に乗り込んでくる。アン・バンククロフトの演技と相まって、観る者は始めからサリバンの内面に溢れる物語に満たされる。無垢で白紙のヘレンに対し、数々の経験を積み込んだサリバンの働きかける。サリバンの献身の日々が始まる。

\* \* \*

映画を見てなお、私は「奇跡の人」とはヘレン・ケラーその人のことだと思っていた。だが原題は『the Miracle Worker』である。「奇跡の働き手」「奇跡を起こす人」ということなら、これはサリバンのことではなければならない。アン・バンククロフトが主演でバティ・デュークが助演なのだ。映画のコンセプトは明確である。わがまを許さず生活の規律をどこまでも求めるサリバンの厳しい姿勢は、ついにヘレンの両親との衝突に至る。障がいを理由にしつ

けに妥協したらこの子に自立はない。職を賭して雇い主に主張するこのサリバンの姿は、半世紀前の（たぶん今も）アメリカ人の理想の自画像に近いものだったろう。「師弟の絆」に加えて「自立する者」。こうして映画・舞台の『奇跡の人』はヘレン・ケラーの物語を神話にまで高めたのである。

半世紀後の聴衆である私は、前述の冒頭場面などに引き入れられて観ながらも、しだいに違和感を募らせていた。ヘレンのかんしゃく、それを許さないサリバンの力づく。テーブルをたたいて反抗するヘレンとこれに厳しく対処するサリバンの両親らの大声。控えめに言ってもかなりにぎやかな場面が続く。

映画は音と光の芸術だ。サリバンの格闘を描くには好都合であろう。ところでヘレンの世界は？音もなく、色もないその世界はどう描かれていたのだろうか。画面からそれを感じることはできなかった。端的に言って、このアカデミー賞映画はヘレン・ケラーその人をすくい取ってはいなかったのだ。

そもそもヘレンは何を感受しているのか。手掛かりは彼女自身による自伝にあり、そこから何を読み



取るか、私たちの想像力にかかっているはずである。

\* \* \*

目が見えず、耳が聞こえない子にとつて、どんなに母親の存在が大きいか。おそらくヘレンにおいて母親と自分が一つになっている。二人がくっついて離れない、というのとは違う。もともとどこから母親でどこから自己かという区別（分節）が成り立っていないのだ。教育とは分別を与えること、それがサリバンの信念であった。ボタンをかけるとカナイフとフォークを持つといった次元から始まって、しだいに言葉による世界の分節を獲得する方へと進むカリキュラムが立てられていたようである。

サリバンは人形を二つ与えて、両者は違うものだが共通の性質を持つものであることに気づかせ、そこから Doll という言葉に到達させようとし、またマグカップに水を入れて、容器の Mug と中身の Water を別の言葉として分かせようとした。

ある日、新しい人形で遊んでいると、サリバン先生は、

別の布製の大きな人形を私のひざに置き、Doll と綴った。どちらも Doll なのだ、わからせようとしたのだ。その前に、私と先生は Doll と Mug という二つの単語をめくり、けんかをしたところだった。先生は Doll は「マグカップ」であり、Mug は「水」を指すということを理解させたかったがうまくいかない。私はどうしてもこの二つの単語の区別がつかなかった。先生はあきらめて、このことから離れるようにしたが、それでもすぐに、同じ問題を持ち出してくる。同じことの繰り返しにがまんできなくなった私は、人形をつかみ、床の上に思いきり投げつけた。

分節なきヘレンの世界では、すべてが連続体をなしているだろう。自己と他者の別はなく、母や父やサリバンといった存在がその都度何らかの気分を点滅させる。目と耳に頼れない分、鋭敏にされた感覚のもたらす柔らかさや硬さ、温かさや冷たさ、匂いの濃淡、甘さや辛さ、さらには空気の温度や湿度の変化といった、分節以前の度（度合）の連続がヘレンを形成する。その計り知れない度の世界を、私た

ちはどこまで追跡できているのだろうか。それを「白紙」だと言つて許されるのだろうか。

\* \* \*

ヘレンにとつてマグカップと水は一体をなすものであつたし、おそらくカップを取る手とカップの把手の間には柔らかさや冷たさや潤いの予感などが感知されていたはずだ。二つの人形を別の物でありながら同一のカテゴリに類別する作業など、ヘレンの現実からはかけ離れた実験のように見える。とうとうかんしゃくを起こしたヘレンは人形を床にたたきつけて壊してしまふ。先の引用に続く部分。

人形が砕け散り、破片が足元に散らばつたのがわかると、喜びが込み上げてきた。この激しい怒りのあとには、悲しみも後悔も湧いてこなかつた。人形を愛していなかったからだ。私が住む音と光のない世界には、悲しみや後悔などという胸をつく思いも愛情もなかつたのである。サリバン先生がほうきをもつて、暖炉の片側へ人形のかげらを掃き集めているのがわかると、不快のもとが

消えてせいせいし、うれしくなつた。先生が帽子を持つてきた。外で暖かい日差しを浴びよう、というのだ。そう考えると——ことばのない感情を「考え」と呼べるのなら——うれしくて小躍りした。

この人形はサリバンの（手作りだつただろう）プレゼントだつた。サリバンのヘレンへの気持ちが込められた人形である。情け容赦なく壊したことを、後年のヘレンは（自分は）人形を愛していなかった」と記す。しかしむろんそれは、サリバン先生など愛していなかったという意味であるに相違ない。

たたかうサリバンの体勢が一瞬ゆらぐ。自分の存在を否定されたのである。片時も教師としての構えを崩さずに来たサリバンが、いま途方に暮れ、ただ人形のかげらを掃き集めることしかできない。綿密に考慮されたカリキュラムは消えてしまつた。次にどうする予定だつたのか、何をしたらよいのか。そうだが、とりあえずこの子の気持ちをしずめよう。ここから冒頭に引用した井戸への歩み行きの場面になる。帽子をかぶらせて外に出ると、米国南部の広い屋

敷の庭は初夏の生気に溢れていた。サリバンとヘレンは並んでこの庭を下って行く。今や、教師と生徒ではなく取り立てて目的なく歩く二人である。ヘレンにとって、初めて厳格な教師サリバンの圧迫から解放されたときだったと言つてもよい。サリバンの無力とヘレンの自由が交錯する。「水」がヘレンに解き放たれる瞬間は、このとき訪れたのである。

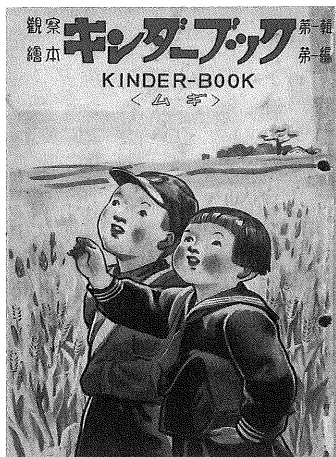
\* \* \*

いったい「奇跡の人」とはだれのことなのだろう。初めの疑問に立ち返りたい。サリバンが奇跡を起こしたのではなかった。むしろサリバンが身を引いたときに出来事が起こったのだ。だとすれば、改めて「奇跡の人」の名はヘレン・ケラーその人に返してやるべきだろうか。ヘレンこそ奇跡の当事者なのだから。いや待て、サリバンもまた、そしてサリバンこそ、驚異の思いでこの出来事がヘレンを襲っているこの瞬間に立ち会っているのだ。サリバンはすでに教師・教育者としての身体を剥奪された。今、ヘレンとともにゆっくり何の計画もなく庭を下るサリ

バンの身体は、ヘレンが行こうとする方向をいっしょに辿る、随したがって行く身体である。それを「教師の身体」に対して「保育者の身体」と呼びたい。そして保育者である限り、サリバンもまたこの奇跡の当事者（単なる目撃者ではなく）となり得たのである。そうとすれば「奇跡の人」はヘレンであると同時に、自分の計画の挫折を通じてこのことが起こることを知ったサリバンでもあると言つてよいだろう。

いやさらに言うべきか。奇跡を起こしたのは「水」そのものであった。サリバンの、自立へと教え導く教師の身体とは違う仕方ではレンの身体を目覚めさせたのは、いわば「水」そのものの力であった。マグカップと区別（分節）されるものとして水があると教えるのではなく、ただ「水」としてこのものがあることを告知したのは「水」自身でしかなかった。この偉大な「奇跡の人」を自然（ピュシス）と呼びたい。

ピュシスとの出会いは普遍的な経験である。だが自然ピュシスは人為ノモスが無力になったときにだけ現れる。普遍的であるとはまさにそのことではないだろうか。



▲画像1 「ムギ」表紙  
河目悌二画（昭和21年）

そして終戦。翌一九四六（昭和二十一年）年八月に『キンダーブック』は復刊される。その特集タイトルは「ムギ」（画像1）。一九二七年の創刊号が「お米の巻」でありながら、表紙の図柄がミレーの（麦の）「落穂ひろい」を模したものであったことがふと思ひ出される。この時、岸辺福雄や和田実と並んで倉橋惣三は「賛助員」であり、編輯顧問ではなかった（倉橋が岸辺と編輯顧問を務めるのは、その次の第一輯第二編（一九二八年）から）。

浜口順子（はまぐちじゆんこ）  
お茶の水女子大学大学院教授。本誌編集主幹。

子ども学探訪

編輯顧問  
**倉橋惣三**  
と  
**キンダーブック**  
12

敗戦後復刊されたキンダーブック

新しいキンダーブック

太平洋戦争勃発の前後から出版界は厳しく統制され、『キンダーブック』は一九四二（昭和十七）年四月に『ミクニノコドモ』と改題された。編集体制は、石原玉吉、西崎大三郎率いる二組にリードされることとなったが、前号で触れたように、一九三七（昭和十二）年ごろになると、倉橋ら編輯顧問の影響は有名無実化していた。

浜口順子

（大学教員）

復刊号の編集主任は丸山長治（倉橋はその後も亡くなる直前まで毎号何かしらの寄稿をし、一九五一年の第六集第一編から一九五五年七月発行の第十集第七号までは「顧問」としての巻末寄稿を続けた）。記念すべき復刊第一号の最初のページを飾るのは、倉橋の次の文章であった（画像2）。

## 新しいもの

### — キンダーブックの再刊 —

倉橋惣三

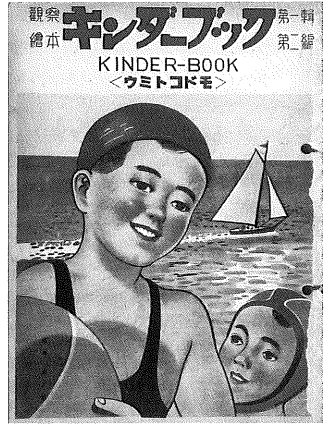
散った後に、落ちた後に、古い根から新芽がふく。新しい種子に、前とは別な花と実が待たれる。その更生の気は勇ましく、生長の力は逞しい。今や初夏の自然がそれであり、立ち上る国の勢がそれだ。その大きい勢に推されて、幼い子らの園に蘇るキンダー・ブックの再刊も亦、その一つである。

まへからの親しみをつづけても頂きたいし、これからの新らしみを期待しても頂きたいし。新しいものによつてこそ、子らを新らしくし、国を新らしくしてゆけるのであるから。

栽えようく。培はうく。幼い子らの園に。



▲画像2 「ムギ」から — 新しいもの — (昭和21年)



▲画像3 「ウミトコドモ」表紙  
高井貞二画（昭和21年）

### 編輯後記

キンダーブック再刊、と唯一度新聞紙上に広告した  
だけなのに、営業部の机の上には朝夕どっしりと重い  
郵便の束がとどけられました。その郵便物の束を見る  
たびに私は目に見えない全国愛読者の方々の本誌に対  
する熱烈なるご期待に唖に熱いものを感じるのでした。

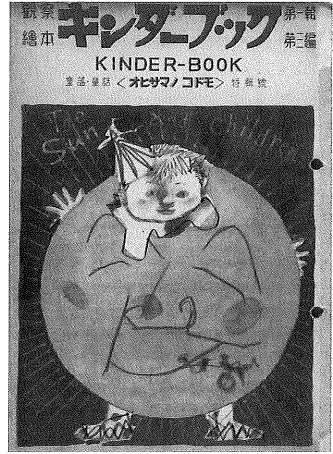
「良いものを作らなければ、日本の明日を担う幼児  
達の為に」こうつぶやきながら編輯員は暑い日中を東  
奔西走しました。（中略）紙にインキに資材難の折で  
すが、第三編童謡童話特輯号「オヒサマノコドモ」よ  
りはもっともっと良い紙を使用して印刷いたします。

（丸山長治）

紙のみならず社会全体の物資が枯渇している状況の中で  
「幼児のための絵本」が復刊されることの意味。印刷の悪さ、  
ページ数の少なさがいつそう、そこにある制作者の希望と  
責任感を強く伝えていいる。復刊の反響は、丸山長治の復刊  
第二号「ウミトコドモ」（画像3）の文に見える（画像4）。



▲画像4 「ウミトコドモ」－編集後記－



▲画像5 「オヒサマノコドモ」表紙

輯者は何と申し上げてよいやら（後略）」と記した。

その濱田先生とは、濱田廣介のことである。「ムラノコ」という文を寄せている（画像6）。

ムラノコ ムラノコ ドコニ イタ  
 カワノ イグサノ カゲニ イタ  
 ハダカデ ハダシデ ナニシテタ  
 キヨウモ ヒナカノ ザコスクイ  
 カワノ ナガレノ キノエダデ  
 アミノ ヤブレガ マタ フェタ  
 ザコザコ ニゲロ アミノアナ  
 コドモ トレトレ ソノサカナ

その第三編「オヒサマノコドモ」は、手に取ってみて、それほど紙質の向上を感じさせるものではなく、ページ数も依然九ページだが、文と画のかき手の強い意志が伝わる（画像5）。丸山は編集後記に、「この編では、現代児童文学界の代表的な諸先生方にご執筆を頂きました。短い締切期間にも拘らず疎開先より、早々と、原稿をお送り頂いた濱田先生はじめ、諸先生諸画家さん方のご尽力に対しまして、編



画像6 「オヒサマノコドモ」から ムラノコー



▲画像7 「ようちえん」表紙

### 幼稚園への夢が見える

一九四七（昭和二十二）年四月発行の第二集第一編「ようちえん」特集（画像7〜15）。この号から、国民学校に合わせ、ひらがな表記となる。占領下GHQの民間情報教育局指導のもとに、この翌年の三月「保育要領―幼児保育の手引き」が発表されるが、当時はまだ大正十五年制定の「幼稚園令施行

規則」が発効している。したがって、「遊戯、唱歌、観察、談話、手技等」が保育項目である。この「ようちえん」編はすべて倉橋惣三が文を書いた。当時の庶民の生活を想像すると、幼稚園の中にこれほどの「豊かさ」は回復していなかったと考えられる。ようやく戦争から解放され、今こそ幼稚園の目指すべき姿を描き、読者と共有したいという願いが表れているような気がする。

最初は画像8の「あかるい おにわ げんきな こども おはよう」が始まる。園庭でわらわらと遊び回る子どもたち、傍でかわる先生の姿が描かれている。画像9では「じぶんでかながえる みんなとそうだんする きをつけてくる くふうしてつくる」とあり、自分の好きなことに探究的に取り組む子どもの姿が描かれ、現代に移してもまったく違和感のない情景である。

— 終わり —

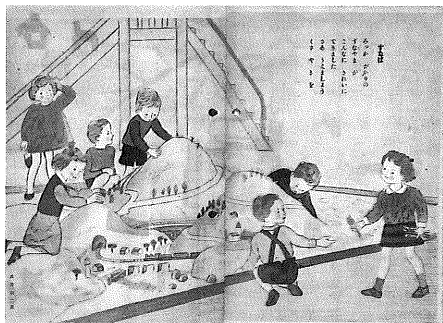




▲画像12 「ようちえん」から — 遊戯 —



▲画像8 「ようちえん」から — 朝の幼稚園 —



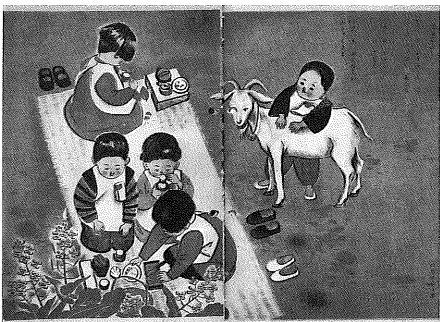
▲画像13 「ようちえん」から — 砂場 —



▲画像9 「ようちえん」から — 手技・積木・図画 —



▲画像14 「ようちえん」から — お話(3匹のこぶた) —



▲画像10 「ようちえん」から — ままごと —



▲画像15 「ようちえん」 — 編集後記 —



▲画像11 「ようちえん」から — 観察 —

# 「そばにいて育つ」

— お茶大附属『幼保』のかかわり —

お茶の水女子大学ECCCELL 第四回保育フォーラムから

私市和子(保育士)  
宮里暁美(大学教員)  
浜口順子(大学教員)

お山の上



いずみ  
ナーサリー

お茶の水女子大学  
キャンパスには、二  
つの幼児施設、附属  
幼稚園(3〜5歳児)  
といずみナーサリー  
(0〜2歳児。大学  
教職員と学生のため  
の認可外施設。定員  
は25名程度)が、「そ  
ばに」建ち(上図)、  
双方の子どもたち

は、生活のいろいろな場面で出会ってはかかわり合  
いをもちます。

二〇一四年三月、私たちは、両園の生活の交差部分  
の意味を問うフォーラムを行いました。さまざま  
形の幼保一体化が進む中で、乳児と幼児が出会うこ  
との原点を問い直したいと考えたからです。幼稚園  
の庭の、木々の生い茂る丘の斜面を上ると「お山の  
上」と呼ばれる原っぱがあります。その右手奥に、  
ナーサリーは「離れ」のようにひっそりとあります。  
そばで育ち合う関係について、ナーサリー、幼稚  
園それぞれの視点から語ってもらいました。

附属幼稚園

## ◆ナーサリーから◆

### 園児との自然なかかわり

幼稚園児とナーサリーの子どもたちのかかわりを幾つかの事例でお話しします。

幼稚園からナーサリーにつながる出入り口の扉をたたいて園児が訪ねてきます。「虫を見せてあげる」と虫かごを持ってきたり、「一緒に遊ぼう」と誘いにきたり、芋掘りの後には大きなさつま芋を抱えて「食べて！」とおすそ分けに来てくれます。春には保育士の後ろに隠れていた子どもたちですが、扉での出会いを重ねるうちに、「なに？」という顔で園児を迎えるようになりました。

六月には年長児が、じゃがいもパーティーのお誘いに来ます。子どもたちは、いつもと違う場である幼稚園の園舎に入ると少し緊張します。テーブルに着くと、じゃがいもの皮をむく、麦茶を注ぐなどの年長児のおもてなしが始まり、お芋を口に入れると子どもたちの緊張がほぐれました。皮をむく姿をじっと見て、苦手なお芋を一口食べる子もいます。

このじゃがいもパーティーをきっかけに園児と子どもたちの距離は近くなるように思います。

### お山での偶然の出会い

ナーサリーから扉を出ると、高い土山があり、ここで子どもたちのさまざまなかかわりが見られます。土山をいとも簡単に上る園児は、あこがれの存在です。あこがれの気持ちは、同じようにやってみてみたいという願いとなり、園児に手伝ってもらい頂上に立った子どもたちの喜び。そして共に喜んでくれた園児は、『今度は一人で上りたい』という小さい人の思いを受けとめ、手を出さずに見守ってくれました。山の上に挑んできた子どもたち。冬になると、立ったまま上れるようになりました。二歳児が土山を見上げると、頂上にいた園児に「チビは上ってくるな」と言われました。すると、『こんなことだってできる』とばかりに立って上り、保育者のもとで「チビじゃないよ」と小声で言い返しました。

別の日、同じ二歳児が他の園児に「手伝ってあげる」と優しく手を差し出されると、『一人で上れる』

という気持ちを抑えて、手を取って一緒に上りました。悔しい思いは強さになり、優しさを受けると優しさが生まれます。お山に心もからだも育まれているようです。

ある日、子どもたちが、丸太の家の屋根から跳び下りる園児を見上げています。高い場所から跳ぶ姿に驚き、園児は誇らしげに跳ぶことを繰り返します。保育者が「かっこいいけど、けがするとナーサリーの子が悲しいよ」と話しました。少し考え、「そうか、心配するね」と言い、はにかんだ表情で跳ぶことをやめました。『自分を心配する小さな存在』に出会ったようです。その後、二歳児が同じ丸太の家の低い場から跳んでいました。

園児が片付けをした後にナーサリーの子どもたちが遊びます。そこには園児の遊んだ跡が残されています。お山を滑った段ボール、落ち葉のプール、滑らかな泥んこなど。これを使って園児の遊びをまねしたり、別の遊びを創り出したり、人と人のつながりだけでなく遊びもつながっているようです。

それぞれの舌舌を大事にし、偶然の出会いからあ

こがれ、受容、時には思いがすれ違うこともありませんが、子どもたちの豊かな遊びと緩やかで自然なかかわりを積み重ねていきたいと思います。

(私市)

## ◆幼稚園から◆

### 「そばにいる」関係の中の私たち

「そばにいる」という言葉が醸し出す温かな雰囲気を感じながら、ナーサリーの子どもたちと幼稚園児、保育者たちのかかわりの実際についてお話しします。

かかわりの中で大事にしたことは、

○子どもの思いから出発する

○子どもの動きに応える

○大人たちは連絡を取り合う



▲じゃがいもパーティーで

○相手の都合を考える

の四つでした。また、自然なかかわりを積み重ねるとともに、合同の研究会を行い、かかわりの意味について確かめました。

ある日の研究会で、「ナーサリーの子が土山を上っていると、幼稚園児が助けようとして手を伸ばす。中には自分で上れる子もいるけれど、伸ばされた園児の手を握って上っている」というエピソードが話題になりました。ナーサリーの子の心の中に、園児の優しい気持ちを受けとめようという、思いやりとでもいうものがあるのではないか。かかわりは互いの思いが重なることで成り立っているということを確認しました。

このようにして語り合ったことが、保育者同士の心に残り、次の出会いの時の「心の構え」（子どもへ向けるまなざしの深さ）につながっていったように思います。

幼稚園の園児たちにとって、ナーサリーは特別な場所でした。「行きたい」という気持ちを持ち、園児たちは扉をノックします。ナーサリーで過ごす中

で園児たちが感じていること、体験していることについて考えてみました。

かかわりを重ねた三月初旬の記録です。

① 駆けださないではいられない気持ち 「久しぶりに遊びに行ける」。喜びに包まれた年長児三名は、ナーサリーと幼稚園をつなぐ階段を駆け上がっていく。

② 会ったら伝えたいことがある 「この子、新しく入ったんだよ」と園児に伝えているナーサリーの子がいた。

③ 思いが言葉になる 散歩の準備をしているのを見て、「お山の上で十分じゃない？」とナーサリーの主任保育士に話す園児。大人のような顔で。

④ 見送る―見送られる関係 散歩に出かける子どもたちを見送る園児。ナーサリーに対する愛着がいっそう増したように思われる。

⑤ 情報を得る、語り合う 「これこれ」「これ見なきゃ」と言って掲示写真を見始めた園児たち。相手への興味があるからこそその行動。

⑥ほっとする雰囲気 赤ちゃんたちがいるナーサリー。ものと人、ものに込められた時間や思いが、温かさを醸し出し、それを感じている。

ナーサリーで過ごした三十分ほどの中で園児たちが感じたことをまとめてみました。子ども同士のかわりはもちろん、「場」や「場」を作っている保育者たち、雰囲気との出会いを通してさまざまに感じ取っていることがわかりました。

園児たちは、感じ取ったことをつぶやいたり、直接保育者に伝えたりしています。感じたことが受けとめられたことで、かわりは確かな経験にたつていったように感じます。「そばにいる」意味がここにあるように思います。

(宮里)



▲ナーサリーと幼稚園をつなぐ階段

## 保育における「ご近所」関係

ナーサリーと附属幼稚園の「そば」で育つ関係は、「いつも一緒」でも、「ひとときの交流」でもありません。直接かわからない時間も、相手が「そばに」いるという安心感があり、どこかで出会えば、相手を気遣い、気持ちよく過ごし、助け合う。この関係性は、「地域」が実体として存在していた時代の大人社会（回覧板、井戸端、寄せなどで象徴される）においては、生活者にとって必要不可欠の社会的距離感に支えられていました。子どもたちも当然その中で守られ育てられていたと言えます。

近所に行く誰かが遊んでいるから入れてもらう、そんな子ども社会はほぼ消失しています。小さい子どもが一人で道を歩いていたら「どうしたの、お母さんはいないの?」と言ってくれる「ご近所」も今はほとんどありません（不審者と疑われるからです）。ナーサリーと附属幼稚園の「そば」の関係性は、現代社会のその深刻な問題を思い起こさせます。

(浜口)

そばにいる！って  
こと

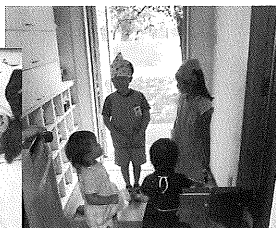
## じゃがいもパーティー



▲捕まえた虫をナーサリーの子どもたちに見せている。「すごいね」と言われてうれしくなる



▲じゃがいもを一緒に食べる



▲園児たちによるお誘い

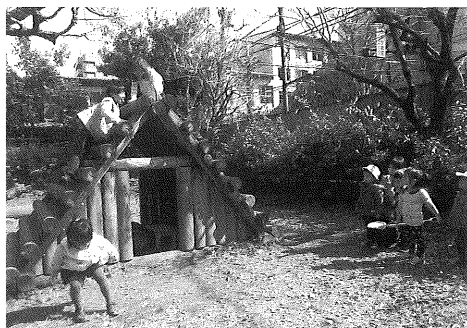


▲上るのを助けようとする幼稚園児



◀自分で上れるけれど助けてもらっているナーサリーの子

## 土山



▲屋根のてっぺんから跳ぶ園児。それを見つめるナーサリーの子どもたち

▼低い場から跳ぶ2歳児

## 丸太の家



▲園児たちのヒーローショーが始まった！ 食い入るように見るナーサリーの子どもたち

## 論考

### アメリカから帰って

津守 眞  
(保育研究者)

この文章は、著者及び出版社の承諾を得て、津守眞著『私が保育学を志した頃』（ななみ書房 二〇一二年）より一部転載（p.306-314）したものです。―編集委員会―

#### アメリカから帰って

昭和二八（一九五三）年八月、私のアメリカの旅は終わった。

アメリカから帰って直ぐ、私達は結婚することを宣言した。双方の家族も、二年近い二人の別離を思つて協力してくれた。暑い八月に帰国後、十日程で結婚式をした。母の誕生日だった。その後私鉄沿線の商店街のアパートの一室に住むことになったが、当時としては恵まれたことであつた。

一年十か月の間に、日本の社会は変化していた。

帰国して私が第一に驚いたのは、「道徳教育」という語が頻繁に聞かれたことだった。いまでは殆ど信じられないかもしれないが、戦争が終わつた直後から一九五一年の頃までは、教



育界でこの語を聞くことは殆どなかった。そのくらい戦時中の道徳は新しい枠組みの中で考え直さねばならないと一般に思われていた。小学校では教科書も墨で塗りつぶし、教育勅語を暗唱することもなくなった。国家を中心とした忠君愛国の道徳とは違う、人間的で普遍的な価値観を人々は探っていたが、新しい言葉が見つからないうちに古い言葉が登場してきたという印象を私はもった。それは早くも日本の右傾化を暗示するように思われた。

第二に驚いたのは、「保育要領」に代わって「幼稚園教育要領」（案）が力をもっていたことだった。「保育要領」は幼児の生活に即したものだから、保育現場では使いやすいものだった。それに対して「幼稚園教育要領」は、目標の羅列で、一見してそこから幼児の生活は見えてこなかった。そのうえ私に疑問だったのは、文部省が定めたものが幼児教育の根拠となるという考え方であった。コメニウス、ペスタロッチ、フレーベルの幼児教育思想、さらにその後の進歩主義教育の歴史はどう関連するのかということだった。保育要領は米国の教育使節団のヘレン・ヘフナン女史に負うところが大きいが、彼女は米国の進歩主義教育の全盛期を生きた人である。いま『文部省幼稚園90年史』（一九六九年 一九六頁）を参照して見ると、「一九五二年、わが国の独立を契機として高まった教育の全面的な再検討の機運とあいまって、一九五六年二月に保育要領が改訂されて幼稚園教育要領となった」と記されている。一九五二年というところとちょうど私がアメリカ留学中のことである。こうしてみると、この時期が日本全体の右傾化の発端をなしているようである。

帰国したばかりの私は、多くの人からアメリカの最先端の研究を尋ねられたが、私にとつてはこの二つがいつまでも消えずに心に留まった。

## ● Dr. デール・B・ハリス教授の来日

アメリカから帰って直ぐに私はお茶の水女子大学に講師として復職した。

附属幼稚園で私が毎日見ていた、幼児が一日中遊ぶ姿の中に幼児教育があるという考えは、帰国して後も少しも変わらなかった。心理学者としてその続きをどうするかということが私の課題だった。附属幼稚園の中に家政学部児童学科の研究室があつて、私は、毎日子どもたちの遊びとそれを生み出す保育を眼前にしながら、心理学はどのように貢献できるかを考えた。それを探って実に長い年月を経ることになった。

アメリカの進歩主義教育協会は私がアメリカから帰って二年後の一九五五年に解散された。アメリカから届く心理学の新しいジャーナルは、子どもの活動を中断して遊びの実験場面をつくり、教育効果のあがるプログラムを作ろうとする研究が主流だった。アメリカも変化しつつあった。

私がミネソタ大学を去って間もなく、それまでミネソタ大学に直属の独立児童研究所が教育学部付属研究所となり、名前も Institute of Child Welfare から、Institute of Child Development (児童発達研究所) と改められた。内容も大幅に変わり、それまで大きな部分を占めていた両親教育部門は廃止された。そのことを、ハリス先生は非常に残念がっておられた。改組にあたってハリス先生は数年間非常な苦勞をされ、ミネソタ大学を去ってペンシルヴァニア州立大学に移られた。一九六八〜一九六九年(昭和四三〜四四年)に、お茶の水女子大学は、Dr. デール・B・ハリス教授をフルブライト教授として招いた。ハリス先生夫妻は小石川植物園のそばのマンションの一室に半年にわたって滞在され、児童学科のために講義を

して下さった。ハリス先生はお茶の水女子大学附属幼稚園を見て、自分はノスタルジアを感じると言われた。先生はミネソタでの私の修士論文を覚えておられて、最近に出版されたクレミンの『学校の変貌—アメリカの進歩主義教育一八七六—一九五七』(The Transformation of the School-Progressivism in American Education-1876-1957 Vintage Books, New York 1961)をお土産に持って来て下さった。アメリカではプログラム教育が盛んで、ハリス先生はそれに対して批判的だった。先生は児童学科のことを Institute of Child Study と呼ばれた。半年の講義の最後に「米国における幼児教育の最近の動向」と「幼児教育理論のための心理学的基礎」を特別講義として加えられた。(デール・B・ハリス、津守眞『児童発達教育学』(光生館 一九七一年)に載せてある。)

一九七〇年前後、私は自分の子どもたちの長期にわたる描画の研究を契機として、ようやく自分の学問的苦悩から脱出しつつあった。

### 児童心理学から保育学の学徒へ

人は壮年期に、自らの心の底の願いと現実に行われていることとの間に食い違いを体験し、その溝を埋めるべく戦う。一九六〇年代、一九七〇年代、幼児の発達と保育を専門としていた私は、自分が訓練を受けてきた実証科学の思考法と保育の実際との間に大きな食い違いを感じていた。私が子どもとの間で最も重要と思ったものが科学の網の目からこぼれ落ちていた。私が子どもの描画の研究からこのことを明瞭に意識したのは一九七〇年前後であった。東京で、ワシントンで、スウェーデンでの国際学会で、ひろく外国の学者と議論することができた。オランダユトレヒト大学のフェルメール先生も私の描画の研究に関心を寄せて励ま

してくださった。この当時、私はルードウィッヒ・クラークスの「生命過程と精神」について考えていたが、フェルメール先生がクラークスを人間学の源流に位置づけておられることを心強く思った。(注 フェルメール先生の恩師であるランゲフェルト先生も後に来日された。それらについてはミネルヴァ書房『発達』88号に詳しい。) 人間科学には自然科学とは異なる視点が必要なこと、それは世界に共通の現代の学問の課題であることを知った。

その時期、私は日々のノートを新しくし、変化して行く自らの考えの過程を記録しようと考えた。

一九七二年十月二十六日の日記には次のように記している。

いまや私が歩んできたもののなかから、またいままでの思考法のなかから、合理主義というか、保育を考えるのに不毛であった思考の残滓をすべて捨てて出発すべき時が来たようだ。子どもとかかわりつつ現象としてみることに、意味をさぐる反省的思考など、思い切って保育研究の転回をしよう。

一九七二年十月三十日

障碍をもつ幼児を幼稚園に入れることの是非を議論する大学の委員会があった。多くの委員が障碍をもつ子どもを園に入れることに原則的には反対しないが、それに伴う先生の負担、施設の改修の必要、人手の不足、他の子どもに及ぼすマイナスの点を考えねばならないという主張をした。病院でも内科の患者と外科の患者とはおのずから異なるところで処置せねばならぬという発言もあった。要するに障碍をもつ幼児を普通の幼稚園に入れることはできないとの結論である。この奥に感じられるのは、人を科学的思考で分断する力である。人と人

との間を分断するのは悪魔（ラテン語で *diabolos* という、人と人との間に何かを投げるという意味）である。私共の常識的考え方の中には悪魔がいる。だが同時に私共には真実に向かう天が備えられている。

一九七二年十一月五日

●子どもと共なる人生をふりかえる

日曜日の午後一杯、私は考えこんで何もしないで過ごした。子どもたちは風呂に入り、台所からは妻が焼き鳥を焼くにおいが流れてくる。

子どもがたずねる。「お父さん クリスマスプレゼントにもらいきれないほど もらったらどうする?」「家を建てかえるかな」と私は何気なく答える。子どもがピアノをとぎれとぎれにひく。森有正は、『バビロンの流れのほとりにて』の中で、「人は孤独な運命のなかに自分をおくことによつて思索する」というが、保育者は孤独とは縁遠い生活の中で思索せねばならぬ。過去十数年にわたつて、私のまわりには家庭でも大学でも、常に子どもたちがいた。私は常に子どもたちの要求に追われて過ごし、そのなかで保育の本質を見い出そうとつとめてきた。だが、その最中に、幼児の専門家として私がとつた学問の方法は外面的観察を主とする当世風であった。重要なものはぼろぼろと腕の下から抜け落ちていた。いまその本質にいくらかふれる道を見出した。私なりに学問の思考法が転回した。その新しい目で資料を見直し、学問化することのできる時ではないか。

子どもの弾くピアノはかなり流暢になった。「ごはんができました」と妻が言う。私はこうして書いている。そんな時間がいま与えられるようになったのだ。孤独ではない運命の十年。

それを考えることのできる時。いずれも私に与えられた時である。

一九七三年七月十八日 夢とその考察

一昨夜の夢

「木の根を掘り起こすと、やぶからしの太い根が木の根にからみついて、どちらが本物の根か分からぬほどである（やぶからしは、蔓性の植物である）。私は、その根を手でときほぐす。これではいままに地上の植物はすべてやぶからしになってしまうのではないかと思う」。

昨夜の夢

「私は何か自分の研究の報告をする。そのあとだれか保育現場の人の声がして『この研究には生命がない』と言う。私は憤慢を感じながら、それも本当なのかもしれないと思う」。

私は長い間、どこかに絶対的な知識の体系があつて、それを発見しあるいは、それを作り上げることに参加するのが学問であると思つていた。はつきりとそのように意識していたわけではないし、部分的にはその逆も考えてはいたが、どこかに右のような前提があつたと思う。しかし、少なくとも、子どもと人間に関する学問の分野では、そういう絶対的な知識の体系や法則があるのではなく、それを見い出すことが学問の課題であるのでもない。もしもそうだとしたら、それを見い出した人は、それを他の人に教え、それに従つて考えることが保育者の課題となる。そうではない。

人間の心という未知なる世界が広がつており、私はそれにふれて、自分にとつての意味を見い出すのである。子どもの行動にふれて、それは私にとつて意味のあるものとなる。私は

そのこのの意味を何度も発見し直し、子どものひとつの行動の分り方が、自分にとってより根源的本質的なものにふれ、かつ、多面的になってゆくのである。

保育を教えるということは同型のものを作り出すことではない。相手が、その人なりに子どものことがよくわかるようになってゆくきっかけとなるのである。

このことを、きょうは、学生さんのレポートを一日ゆつくりと見ていて、自分なりに考えた。他人の体験を読み、またはひもどくとき、そのことから自分なりに考えることができる。その人と同じところで体験したならば、聞くだけでは違ったように考えることができるであろう。また、他の人が、その人の体験をその人なりに根源にふれて、いろいろの面から考えたことを聞くことは、自分が自分なりに考えて行くのにためになる。それが教えるということのはたらきである。

## 注

デール・B・ハリス先生は、津守のアメリカ留学先（ミネソタ州立大学児童研究所大学院）における指導教官であるが、初めて会った時（一九五一年）のエピソードが次のように書かれている（『私が保育学を志した頃』p.89）。

「当時先生は40代はじめてで、児童研究所の所長になったばかりだった。秘書のメアリーは、ハリス先生は学生の間で一番人気のある教授だと教えてくれた。握手をするとすぐに、先生は友人の原子物理学者に言及し、彼は広島原子爆弾で良心を責められて神経を病んでいると話された。そして申し訳ないと私に謝られた。私はアメリカの学者にこういう人がいることに心を打たれた。」

# 『幼児の教育』平成二十六年 総目録

## ◇春号

新しい「まど」から  
保育現場で気になるコトバ考1

「安全」って何だ？

・ 幼児にとって安全とは？ 木下勇

・ 「安全」は日々の保育の充実から 當銀玲子

・ アメリカの保育・教育施設における安全意識 中島千恵

・ 「幼児の教育」アーカイブズから 矢萩恭子

子どもが育つ場所から  
子どもと音楽の出会う場所をつくる

私の保育ノート 石川眞佐江

・ 笑顔あふれるブレイルームを目指して 鈴木のどか

・ 私の大好きなところ 寄藤陽子

・ 保育の世界を豊かに生きる子どもたち① 教える体験と教えられる体験 榎沢良彦

古典の散歩道

「くるみわり人形とねずみの王様」

編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック⑨

二つの草花特集にみる編集の方向性の揺らぎ 浜口順子

倉橋惣三先生の教えを受けた保育者 永倉みゆき・山下紗織

ベルタ・ロンゲのルーツをたどる4

ベルタの波乱の後半生(続)

ディーター・レドナック・

ベルガー有希子・大戸美也子

## ◇夏号

研修と詩感  
コトバ考2 「研修」って何だ？

・ 保育者の研修「講習」から「学び合い」へ 高田文子

・ 「価値付け」る研修 高田文子

・ 農家営業を通じて学んだ視点 香倉玉実

・ 「幼児の教育」アーカイブズから 草信和世

子どもが育つ場所から  
自然の中の「いのちの村」 庄籠道子

私の保育ノート

・ 発表会(劇遊び―五歳児)の取り組 み 京極桃子

・ 「初めて」の一年を振り返って 石川綾子

・ 保育の世界を豊かに生きる子どもたち② 集まりを生きる子どものあり方 榎沢良彦

古典の散歩道

古今和歌集仮名序を保育者が読みました

編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック⑩

イキモノを真つすぐに見ているか 浜口順子

アサガオの家族になってお世話をしよう 松村英治

メディア接触と子どもの発達 安治陽子

## ◇秋号

子どもを守り育むため  
コトバ考3 「子どもの最善の利益」  
って何だ？

・ 「安心」という言葉を知らないくらい安心の中で生きること 青木悦

・ 子どもの権利の視点から 大田新子

・ よりどころとなる環境の中で育つ 笹川加奈子

・ 「幼児の教育」アーカイブズから 矢萩恭子

子どもが育つ場所から  
大イチョウの下で 大橋利恵子

私の保育ノート

・ 物理的環境について 布川篤史

・ 人と人とのつながりの中で 石塚美穂子

・ 保育の世界を豊かに生きる子どもたち③ 一斉活動を創造的に生きる 榎沢良彦

古典の散歩道

「星の王子さま」 高橋洋代

編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック⑪

戦時体制中の「オハナシ」 浜口順子

「食育」で問う「子どもの視点」とは？ 吉田隆子

大規模改修工事の中で―子どもたちと創り上げた工事中の保育― 宮里曉美

## ◇冬号

評価と快楽  
コトバ考4 「評価」って何だ？

・ 幼児期の教育における評価 神長美津子

・ 「主體的な語り合い」が育む保育の質 松水静子

・ 柔軟な姿勢で新しい評価を 光畑由佳

・ 「幼児の教育」アーカイブズから 草信和世

子どもが育つ場所から  
お母さんが元氣であることが保育の原点 武田京子

私の保育ノート

・ これまでの保育を振り返って 齊藤雅子

・ 変わるもの・変わらないもの 森藤郁子

・ 保育の世界を豊かに生きる子どもたち④ 「会話すること」「みんなの前で話すこと」における子どもと生 榎沢良彦

古典の散歩道

奇跡の人とはだれか『ヘレン・ケラー自伝』 佐治恵

編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック⑫

敗戦後復刊されたキンダーブック 浜口順子

「そばにいて育つ―お茶大附属『幼保』のかかわり―

私市和子・宮里曉美・浜口順子

アメリカから帰って 津守眞

『幼児の教育』平成二十六年 総目録



子ども学の

# ひろば

## 本の紹介

『星の王子さま』からのクリスマス・メッセージ  
高橋洋代 教文館 2013年

前号「古典の散歩道」にご登場された著者は、出会いから50年以上の長きにわたって「星の王子さま」を読み続け、コンパクトながらもかくも魅力的なこの一冊を上梓した。

星の王子さまについて書かれた本はそれこそ星の数ほどあるだろう。けれども、この本ほど作品世界と作者に対する尊敬と憧れの念に貫かれた著作は他にないのではないかと感じる。こんなふうに一冊の本に惚れ込むことができるなんて、その思いをこそ尊敬し憧れを抱かずにはおれない。

パスカルの「パンセ」とのつながりについての考察や、それに気づかせる親友レオン・ウォルトへの献辞の読み解きなどは著者のオリジナリティあふれる部分であるし、著者が出会った子どもの姿や学究した事柄がそこそこに描かれ絶妙に引用されていることは、発達心理学の研究者であるがゆえの独自性であると思う。それと同時に、いや、それ以上に、「そういうことじゃないかしら、サンテックス（星の王子さまの作者サンテグジュペリの愛称）」「私はこう思うのだけど、違うかしら、王子さま」という問いかけ、あるいは問いかけを超えた、いのちあるものとの“対話性”が全編に貫かれているような気がする。そう。若かりし日々を過ごした60年安保闘争のさなかに「星の王子さま」に初めて出会った衝撃の時から、著者は幾度となく、本を「読み返した」というよりも、王子さまやキツネや、あるいはサンテックスと、さながら生身の人間同士やそれを超えるような深い交わり方で、対話をし続けてきたのではないだろうか。20年前にこの世を去られたご夫君も「よかったね。よくやったね」とこの出版を喜ばれておられるに違いない。「星の王子さま」を読むには格好の季節が巡ってきた。ぜひ本書を併せお読みいただきたい。(KT)

## コミックの紹介

『保育士は体育会系!』河原ちよっと  
サンマーク出版 2014年

12年間保育士をしていた著者が、見やすい絵とわかりやすい文で、保育の仕事丁寧的確に、とても面白くとてもまじめに描いている。保育者であれば「ああ、確かに」とうなずくことが多いだろう。決して思うようにはならないけれどやっぱりかわいい子どもたちと、大変だけれどやり甲斐のある保育という営み。必要に応じてコラムを組んできちんと文章で説明していることにも、子どもや保育者、保育に対する誠意が感じられる。(KT)

## お茶の水女子大学 ECCELL 社会人プログラム 平成27年度 前学期(4月開講) 受講生募集

乳幼児教育・保育や子どもにかかわるすべての方々を対象にした、夜間(18:20~19:50)または集中講義。「乳幼児発達障害論」「コミュニティ保育資源の活用」「子ども理解と保育の探求」「乳幼児保育マネジメント」などの開講を予定しています。

出願期間は、平成27年2月下旬~3月上旬です。詳細は下記までお問い合わせください。

【URL】 <http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji>

【Eメール】 [nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp](mailto:nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp)

【TEL】 03-5978-5949 (担当 安治・猪股)

## ◇訂正とお詫び◇

前号(秋号)のP44「古典の散歩道」の著者、高橋洋代先生の現在の肩書は、「(保育アドヴァイザー)」です。不手際を深くお詫び申し上げますとともに訂正いたします。

(編集部)

## 編集後記

今年度は、特集として【保育現場で気になるコトバ考】ということで、「安全」「研修」「子どもの最善の利益」「評価」と、保育現場の中ではちょっと敬遠してしまいがちなテーマをあえて掲げました。

冬号は、「評価」。「評価」という言葉には、何らかの基準に照らし合わせて客観的に価値を決めていくという印象があり、保育にはそぐわないように思われがちです。保育は、一人ひとり違う子どもたちがその子らしく成長していけるように、一人ひとりに合わせて保育者が日々かかわっていく行為の積み重ねであり、目に見えるような「結果は遠きにある」(倉橋惣三「就学前教育」より)ものだからです。

いろいろなことが目まぐるしく展開していく日々の保育の中では、立ち止まってゆっくり考えている暇はありません。子どもたちと一緒に過ごす時間が自分の「身体」をくぐり抜けていきます。子どもた

ちと応答的に過ごした時間の名残がまだ残っている「身体」で、日々の保育を振り返ることの大事さが今号においては貫かれているように感じました。倉橋の語っている「保育の味」もそうです。味は「身体」で感じるもの。保育における「評価」というものは、子どもが感じているものを一緒に感じようとする保育者の「身体性」を抜きにしては語れないということを改めて感じました。佐治先生の『ヘレン・ケラー自伝』の中に書かれている「随っていく身体」(保育者の身体)という表現も、保育者の「身体」の在り方についての鋭い指摘が含まれていました。

もう一つ今号で共通して語られていたことは、同僚と共に保育について語り合う時間の大事さであります。神長先生の「私の保育」から「私たちの保育」、さらには「わが園の保育」という言葉が深く心に響いてきました。(I)

## 次号予告 幼児の教育 春号 2015年3月刊行予定

新企画、新連載がスタート! 充実した内容でお届けします。

**特集** 保育現場で気になるコトバ考 5 - 「居場所」って何だ? - 関口はつ江氏ほか

**新連載** 保育エッセイ 河邊貴子氏

**コーナー** 古典の散歩道 第5回 穴戸洋子氏

※タイトル内容が変更になる場合もあります。

## 幼児の教育 冬号 第114巻 第1号

平成27年1月1日発行  
編集発行人/浜口順子  
編集担当/田中恭子  
発行所/日本幼稚園協会  
〒112-8610  
東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所/株式会社フレーベル館  
電話:03-5395-6604(編集)  
振替/00190-2-19640  
印刷所/図書印刷株式会社  
定価/本体741円+税  
©日本幼稚園協会 2015 Printed in Japan

編集委員/伊集院理子  
菊地知子  
高橋陽子  
灰谷知子  
編集協力/フレーベル館

●ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●

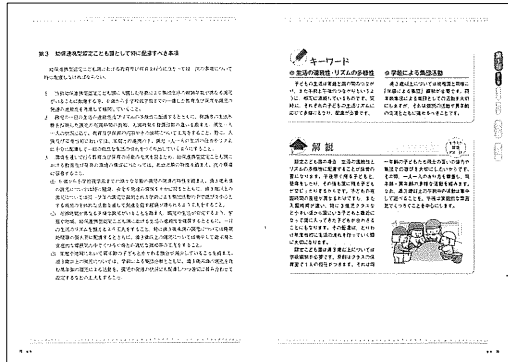
# 認定こども園での実践にすぐ役立つ 幼稚園・保育所は今後の基本資料に



## はじめての幼保連携型認定こども園 教育・保育要領 ガイドブック

無藤 隆 / 著 定価 本体1,000円+税 26×19cm 128ページ

平成26年4月30日に告示された幼保連携型認定こども園教育・保育要領の全文を解説。認定こども園の保育者はもちろん、預かり保育を行う幼稚園、教育機能に力を入れる保育所の保育者にとっても、参考になる1冊です。



実践に役立つ  
イラスト解説付き！

34520

条文・キーワード・解説が見開きで読みやすい

### POINT1 3つのステップで、1からわかる！

1  
条文

2  
キーワード

3  
解説

を見開きで展開。条文のポイントが体系的に理解できます。

### POINT2 要領・指針との関係がわかる！

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」  
「幼稚園教育要領〈平成20年告示〉」  
「保育所保育指針〈平成20年告示〉」  
の比較表で条文の対応関係が一目わかります。

## 幼保連携型認定こども園 教育・保育要領

〈平成26年告示〉

## 幼保連携型 認定こども園 教育・保育要領

〈平成26年告示〉

フレーベル館 / 編  
定価 本体150円+税  
21×15cm 32ページ

34510

平成26年告示の「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の全文を掲載。

お求めやすい価格です！

# 保育に迷った時に読む“珠玉のことば”集

保育をもっと楽しむ!

## 保育がもっと好きになる 保育に生きる珠玉のことば

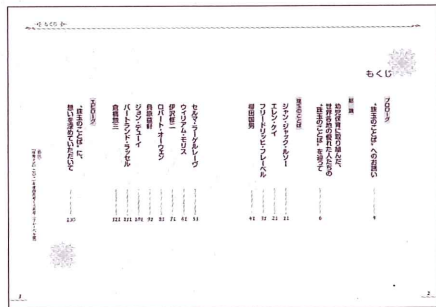
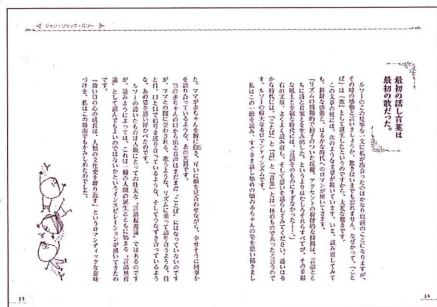
荒井 洌/著 定価 本体1,200円+税 19×13cm 132ページ

ルソーやフレーベル、倉橋惣三など、先達が遺してくれた、保育に生かせるヒントが詰まった「珠玉のことば」の数々。

「保育観・子ども観」の道標として役立つ1冊。



10947



### 荒井 洌の関連書籍

33400



#### 倉橋惣三 保育へのロマン

倉橋は決して古くない! 日本保育界の巨人・倉橋惣三の思想と理論を、現代の保育現場に活かす道を示した注目の1冊。

定価 本体2,000円+税  
21×15cm 220ページ

36600



#### エレン・ケイ 保育への夢 『児童の世紀』へのお誘い

エレン・ケイが執筆した『児童の世紀』。ここでは、現代の保育や子育てへの素晴らしい示唆が随所に紹介されている。

定価 本体2,000円+税  
21×15cm 176ページ

10743



#### 園をみどりのオアシスへ 幼児保育における放牧の思想

北欧保育と今こそ求められている倉橋惣三やエレン・ケイの保育観を融合した、新しい保育のあり方(オアシスとしての園)を提案。

定価 本体1,700円+税  
21×15cm 180ページ